

平成 23 年度  
老人保健健康増進等事業  
による研究報告書

グループホームにおける災害時対策に関する研究報告書  
別冊

東日本大震災 被災グループホームに学ぶ

2012年3月

公益社団法人日本認知症グループホーム協会

## [目次]

### 第1部 被災地への訪問調査ヒアリング記録より

特定非営利活動法人なごみ グループホームぽらん気仙沼	1
有限会社村伝 グループホーム村伝	9
社会福祉法人典人会 グループホームひまわり	15
有限会社ファースト・ケア グループホームあんしん館	21
有限会社ヘルパーはうす グループホームまぶる	30

### 第2部 東日本大震災追悼式典

#### 「3.11を忘れない！」～これから私達にできること～」被災地からの報告より

有限会社古川商事 グループホームございしよの里	37
特定非営利活動法人今が一番館 グループホーム今が一番館	43

公益社団法人日本認知症グループホーム協会は、平成 23 年度老人保健健康増進等事業により、「グループホームにおける災害時対策に関する研究事業」に取り組んできました。

平成 23 年3月 11 日に発生した東日本大震災は、現地の認知症グループホームにも未曾有の被害をもたらし、事業所の災害時対策のあり方のみならず、被災直後の外部支援のあり方や、情報発信とその共有の方法、緊急時の資源・物資の調達方法、利用者・職員等のメンタルヘルスなど、さまざまな課題を投げかけることとなりました。

この冊子は、平成 23 年 6 月 26 日～28 日にかけて宮城県、岩手県沿岸部のグループホームを訪問し、被災者の皆様から聞かせていただいた様々な体験や意見を記録として残したものです。本研究事業の取り組みとして作成した研修用DVD「東日本大震災 被災グループホームに学ぶ」と合わせて、グループホーム管理者等の方々から聞こえてくる声に耳を傾け、今後の災害対策に役立てていただければ幸いです。

グループホームにおける災害時対策に関する研究委員会



## 第 1 部 被災地への訪問調査ヒアリング記録より

### 訪問調査 グループホームぼらん気仙沼

訪問先	特定非営利活動法人なごみ 統括本部長 木村伸之氏 グループホームぼらん気仙沼 管理者 帛岩(とらいわ)敬子氏
被災により 全壊・半壊した 事業所	グループホームぼらん 宮城県本吉郡本吉町後田114番地12 グループホームポラーノの杜 宮城県本吉郡本吉町後田113番地 ぼらんデイサービス 宮城県本吉郡本吉町後田114番地6
訪問日	2011年6月27日

※ この原稿は、訪問調査を実施した2011年6月末現在の情報をもとに記述しています。



#### <事実関係>

- ・ 気仙沼市本吉地区の事業所が建物全壊。流失。利用者 23 名中3名行方不明。職員は全員無事
- ・ 本吉の事業所は、①グループホームぼらん(9名1ユニット)、②グループホームポラーノの杜(9名1ユニット)、③デイサービスぼらん(定員 10 名)という構成
- ・ 訪問調査当時は、グループホームぼらん気仙沼にて約 20 名の利用者が生活

#### ○震災当日の状況等

- ・ 3月11日当日は、気仙沼市内介護サービス事業者の管理者会議に出席していた。地震発生後法人の管理者達は皆、すぐに各々の事業所へ向かった。
- ・ 初めに駆けつけたグループホームでは被害はなかったものの、水も電気も止まり、寒さもあったので、隣接県の同法人グループホームへの避難を指示した。その後、本吉の別のグループホームに向かった。
- ・ 本吉に向かう基幹道路では、家が道路に乗り上げるなど散々な状態であり、その先にとてもたどり着ける状況ではなかった。一旦皆が避難している隣接県のグループホームに、利用者の様子を見に向かった。そこで、利用者の何人かが行方不明であることがわかった。津波直後の3時半くらいから雪が降った。皆薄着であった。「とにかく暖かく、体調を崩さないように」と言い置いて、自分一人で夜8時頃気仙沼に戻り、徒歩で本吉のホームを見に行った。
- ・ 辺りは、すごく静かで、ときどき港の(火災の)爆発音が響いた。亡くなられた方が横たわっていたり、あぜ道の下に車が沈んでいたり…。車は、ライトが点滅し、クラクションや盗難防止のアラームが鳴り続けていた。恐ろしかった。
- ・ 月明かりの下、ホームの建物は無くなっていた。建物が残っていて、何人かの方がいるのではないかと、誰かいれば…との思いで行き着いたが、ものの見事に建物そのものから無くなっていた。そのあと泣き泣き歩いて帰った。
- ・ 避難所を回りながら諦めかけた時、中学校の体育館で利用者さんと職員に出会い「ああ、生きていたんだなあ」と思った。「明日になったら、車を調達して迎えにくるからね」と話をした。
- ・ 市役所に災害対策室が設置されると知り立ち寄ったが、市役所も被災していた。本吉の利用者3名が行方不明であり、他の利用者は室根に避難していることを伝えた。当日の時間がどのように経ったか、あまり記憶がない。あの日、とにかく歩き回った。その晩は室根のグループホームに戻った。
- ・ 翌日以降、行方不明だと思っていた職員が、1人、また1人と避難先のグループホームに戻ってきてくれた。結果として職員の人的被害はなかった。

#### ○避難の状況等

- ・ 本吉の事業所は、9名1ユニットのグループホーム2つ(ぼらん、ポラーノの杜)と、そのあいだに位置する定員10名の小規模デイサービス(デイサービスぼらん)と居宅で構成されていた。建物は各々独立していた。
- ・ 当日の利用者は、認知症グループホーム利用者の方18名+デイの利用者5名の23名だった。デイの利用者のうち3名は10日間一緒に避難した。2名はその後入所された。職員数はグループホームとデイサービスの職員、合わせて15名であった。
- ・ 避難当時の話は職員から伝え聞いた。地震の大きさから津波がくると考え、職員が利用

者を車に分乗させて避難した。法人には7人乗りの活動車が2台あり、職員のワンボックスカーも1台あった。避難行動は職員全員で行った。避難時、利用者には職員の指示がきちんと伝わっていたと思われた。

- ・ 車に利用者に乗せ、ホームから500メートルほどの高台の集会所に避難したが、第一波が来た時に危険を感じ、基幹道路を通過してその先の中学校まで車で二次避難をした。移動に使用した車は職員の車5～6台、ホームの車2台、計8台くらいであったと思われる。
- ・ 本吉の2つのグループホームは、利用者の利用期間も比較的長く、ADLが低下している方が多かった。症状の重い利用者から車に乗せ避難した。軽い方が最後の車になったが、その車が流されてしまった。職員は300メートルほど流されたところで奇跡的に救助されたが、後ろに乗っていた利用者の方々は…。1人の方は、最近DNA鑑定で本人と確認されたという状況である。
- ・ 最後の車は、国道に出て被災にあった。あぜ道を通って山側に避難するのが通常のルートなのだが、「地震であぜ道が崩れており、水路のコンクリートが落ちているだろう」という判断だった。それはもう、責められることではない。
- ・ 本吉の4事業所は、毎年1つずつ、立ち上げてきた。大資本があったわけではない。「地域にやっといい空間ができたな」と思っていた矢先であった。それが全て流されてしまい、自分としてもショックを受けている。
- ・ これまでも「災害時、1ユニットでは職員だけで利用者を守りきれない」と感じていた。2ユニット目を近くに置かせて欲しいと申請し、グループホームが隣接するというイレギュラーな状態が実現した。人的被害を出してしまったものの、2ユニットであったから、多くの方を守ることができたのだと思いたい。建物自体がない。跡形もない。引き潮で持っていかれたのだと思う。それでも利用者と職員合わせて40名近くが助かったのだから、奇跡であり、「よくぞ」と感じている。

#### ○利用者の被災後の様子等

- ・ 現状、建物が残った気仙沼のグループホームに、他のグループホームの利用者の方々が同居している。相部屋である。
- ・ 利用者の方々も「大変なことが起こった」と感じている。驚いたことには、被災直後の電気も通じず寒さに震えながらの状況下、自身も弱者であるけれども、さらに弱者である方への思いやりというものがみられた。仲間の利用者への声かけも増え、気遣いもできていた。職員に対しても「おまぁ、大丈夫だ？」と声をかけてくれるなど、攻守逆転してしまった。「孫を守らなくては」といったような思いなのかもしれない。「いいから、あんた食べなや」と食事を分け合ったり、「布団に寝てもいいね？」と尋ねたり。ありがたかったし驚きだった。今のホームは、とてもいい状態である。
- ・ 現在のようなイレギュラーな状況に置かれたからといって、一概に症状が悪化するという

わけではないようである。そのあたり興味深い事例なのではないか。

- ・ 職員の継続的なケアがあれば、乗り越えられることだと感じている。場所は変わっても、いつもと同じケアがあり、声かけがある。コミュニティごと移動してきたのが、よかったのかなと思っている。職員の努力によるものである。常時、事業所同士交流していたのも功を奏した。
- ・ 利用者の家族への安否連絡は、人づてや携帯電話のメール機能を利用して行った。本吉地区は、つながりの強い地域であり、従来から人づてに情報が回る傾向があった。
- ・ 生きている方の命をつなげることが、「やるべきこと」としてすぐ目の前にあった。風邪をひかせない、食事を調達するといったことで手一杯であった。今思えば反省することはたくさんあるが、極限状態のあの時期を、職員とともに見事に生き抜いたというのが正直な感覚である。

#### ○被災後の職員体制等

- ・ 職員を守っていくことが、利用者さんを守っていくことだ。職員を厳選してきたので、一人でもやめられてしまうと痛手である。職員が燃え尽きないようにすることが、今後とも大事である。
- ・ こういう時だからこそ、収支を考えず、職員体制を厚くして、職員自身のメンテナンスもできる体制を作ることが大切だと思う。事業継続のためにも必要である。
- ・ 職員も被災者である。家族が行方不明である職員、家を流され避難所から勤務している職員もいる。また、自車を流された職員も多い。一番大変だったのは、職員を安心させることであった。自分の生活がどうなるのか、収入がどうなるのかがわからない中では、いいケアはできない。そうした職員の不安に対し、「大丈夫だから」と声かけし、経営者として下支えしていくことが大事であった。「このようにしていくから、安心してくれ」「雇用は守るから」というような話をして対応してきた。
- ・ 施設再建に向けメニューはいろいろある。県と市はとても良くしてくれており感謝しているが、国からの指示待ちで動けない。
- ・ 被災後に、震災による失業者や被災した他施設の職員を採用している。

#### ○避難訓練、夜勤体制等

- ・ 年に1回は津波を想定した避難訓練を実施していた(火災想定は年2回)。それを活かした。自治体発行の『浸水マップ』もあったが、津波の到達範囲はそれをはるかに超えていた。
- ・ 『わがこと』として感じ、避難することができた背景には、地元採用職員の存在がある。地元出身の職員は「地震がきたら津波が来る」と認識していた。
- ・ 大津波体験後、不安感やプレッシャーから精神科に通い始めたり、揺れていなくても揺れを感じたり、過換気症候群を誘発している職員もいる。グループホームのレギュ

ラー職員を確保するのは困難なことである。今、現在は、夜勤体制 2 人なので利用者を守ることができているが、仮設に移ったらどうなるのか、1 人夜勤体制に戻るのか等、職員全員が心配している。

- ・ 若い職員や、子育てを終えた年代の職員が、安心して勤務できる職場であることを守りたい。ここは、小規模多機能とグループホームが併設した事業所であるが、建物はつながってはいない。それでも夜勤時に、「壁の向こうには誰かがいる」という安心感を持てる。このような複合施設であることも1つの解決策だと思う。それ以上に、きっちり夜勤二人体制を作ることが大事である。そうでないと安心を守れない。

#### ○地域との関わり等

- ・ もしまた施設を再開できたならば、地域の皆さんに対し安心と安全を提供するような機能を備えなければいけないと思う。反省と後悔から強く感じている。「同じ場所に同じものを」というのは復旧復興の大原則であり、ましてやグループホームは地域密着型サービスである。生活圏域は守っていきたいが、浸水地域に再建するわけにはいかないというジレンマがある。

#### ○ネットワーク体制等

- ・ 震災を機に、志を同じくする人たちと手をつないでいなくてはと、感じている。普段から一生懸命ネットワーク作りをしておけばよかったと思った。こうした大災害の場合は、他の法人や外部の支援を受けることが大事だと痛感している。
- ・ ボランティア職員の応援を内陸部から1週間いただき、その間職員が休みを取ることができた。本当に助かった。いい職員さんを見れば、いい法人なんだろうなと思えた。この機会にいいところを吸収したい。
- ・ 極限状態の中で、皆、よく利用者を第一に守ってくれた。すばらしい職種だなと思う。3月11日の夜を一緒に過ごした人たちは、何にも替えがたい。大事にしていかなくてはと思う。
- ・ 今後は、被災した方々や、復旧の遅れているところに対して、自分たちが助けを提供できるようにしていきたい。本当にお互い様ということがよくわかった。

#### ○事業継続・再建等

- ・ 敷地内に施設の新設の着工をし始めたところである。
- ・ 資金は全額融資による。すばやい対応ができるのは、事業型NPOだからだと誤解を招く恐れもあると思う。しかしそうではない。被災した状況の利用者が、いつまでも今の良い状態であるとは限らない。もうすぐ暑くなる。また、現状相部屋である。いつ認知症状が悪化し、周辺症状が出てくるかわからない。ケアを提供するスペースの確保が大事だと考えて踏み切った。
- ・ 他の法人のグループホームでは、利用者の家族から、「(現状相部屋であるのに)震災



前の個室の利用料を取るのか」と聞かれたそうだ。でも、今、この状況で、利用者の安心と安全を確保するために、職員が何倍もの努力で対応していることも理解してほしい。

- ・ 選択肢は本当に少ない。職員と利用者さんがいるのだから、事業継続するしかない。好んでやらなくてはいけないのだと思う。そのためには、制度をどれだけ効果的に活用するかというところにかかっていると思う。
- ・ 復旧復興のための補助金が前払いや概算払いになるかどうかが不透明である。とりえず渡して「残ったら返さないよ」というような対応も、大震災時には必要なのではないか。施設には利用者がある。利用者を、自己努力で3ヶ月守ってきた。燃え尽きないようにするには、どうしたらいいか考えながら。そうした努力に対し、「5月に申請して、8月頃には結果が出ます」では、話にならない。自分が対応すべき行程表を作り、やっていくしかない。
- ・ 被災した後、収入も減っている。2ヶ月遅れの支給で、その上、建物の再建や流された備品の調達を「自己資金でやりなさい」など無理な話だ。踏ん張っているが雄々しくはない。うなだれないようにしないと、と思っている。踏ん張っているのか、おじけづいているのか、よくわからない。
- ・ 一昨年から宮城県の緊急雇用対策の1つである職員雇用の助成金事業に参画し、その対価としての助成金が5月末に入金されなかったら、キャッシュフローは破たんしていたと思う。運営する事業がグループホーム事業のみであったら、利用者さんを手放した時点で職員の雇用継続もアウトとなる。

#### ○行政支援・制度等

- ・ 既存の債権は国の公的機関が買い取り、ゼロから再建していけるような施策がほしい。そうした施策があれば、皆あとは、自己責任と努力で再建していけるのではないかと考えている。
- ・ 交付金については、市を通して1次協議(4月15日通知)に書類を提出した。しかしながら、そのあと何も音沙汰がない。見えない状況を待たなければならないから、自分でやるしかないのだが、不安もある。今のままだと二重債務は必至である。
- ・ 国に対しては、不平不満というより驚き以外ない。何も出てこない。「何もないんだ」という驚きである。被災してからこれまで国からは1円たりとも支援はない。これが日本という国なのだという驚きしかない。自分たちが、営利事業と考えられているからかと、最近強く感じる。大震災への対応は四角四面では割り切れないところがある。

#### ○復興復旧に向けて

- ・ 「国と事業者でいいかたちを作りましょう」という姿勢で、実体験から、作り上げていくということが大事であろう。
- ・ グランドデザインとなると、上層部と国の復興計画の指針が絡んでくるので難しいという

ことを、自分も市の担当者も感じている。気仙沼市は4期計画が適正に終われば、『福祉の町』として完結するステージにきていた。今年度は最終年度であった。そういう意味では残念としか言いようがない。市としても脱力感はあると思う。しかし、コンパクトシティになって立ち直っていけばいいのではないか。

#### ○今後について

- ・ 家を流された人、生業を流された人、両方流された人もいる。しかしながら、会う人会う人皆、「復旧復興だ！」と、エンジン全開である。興奮、熱気。終戦直後の闇市のような感じなのかもしれない。自分はというと、うつむいてもいけないけれども、そんなに熱くなってやっているわけでもない。「平常心を取り戻したいな、フラットにやりたいな」と感じている。
- ・ 「最後は前よりもいい形にしたいな」という思いがある。あそこまで造ったのだから、そこまでは、また造ることができる。だったら、制度を活用してさらに良いものを造っていきたいという、向上心のようなものはある。ノウハウをなくしたわけではない。良いものを造ることができると思っている
- ・ これまで自分は内向きであったが、今回に限っては、制度の不適正なところなどについて、声をあげて話していきたくて考えている。不平不満ではなくて、「これでは実際に守れなかったものがある」「これからの復興に対して障害になっているものがある」ということを、淡々と発信していきたくて思っている。
- ・ 夜勤1人では利用者を守れない。だとすれば、これからは必ず2ユニット体制にして、夜勤1人と宿直を置くなどの制度化を行い、給付の方でなんとか面倒をみてほしい。そういったお願いを、これまでは言ってこなかったのだが、大きな声で言っていきたいと思う。職員も不安に感じている、オーナーも不安を感じている、国だって不安を感じているはずである。不測の事態に対応できるような人員体制と給付といったことをお願いしていきたくて思っている。
- ・ 避難所暮らしの中学生の女子が「おばあちゃんになっても、孫に『しつこいよ』と言われるくらい、今回の震災の話を語っていく。」と話していたという記事を新聞で読んだ。私も、何度でも言うつもりである。事実を語っていきたくて。外部の目があることによって、モラルダウンせず、いい復旧ができるのではないかと思う。今後とも継続的に、電話なり、訪問なりして欲しい。ぜひ、その後の動きも気にかけてほしい。

#### ○管理者の立場から【厩岩氏】

- ・ 新設グループホームの着工が現実となり、進捗状況を目の当たりにすることが、職員の希望や利用者、ご家族の安心につながっている。
- ・ 現状、相部屋であることや、定員の2倍の利用者さんがいることにより、日々いろいろある。だが、人は人の行動や関わり方によって、その行動が促進されたり抑止されたりする面がある。・・・いい面が引き出されている方が多い。「お互いに歩み寄り」「相手に合わ

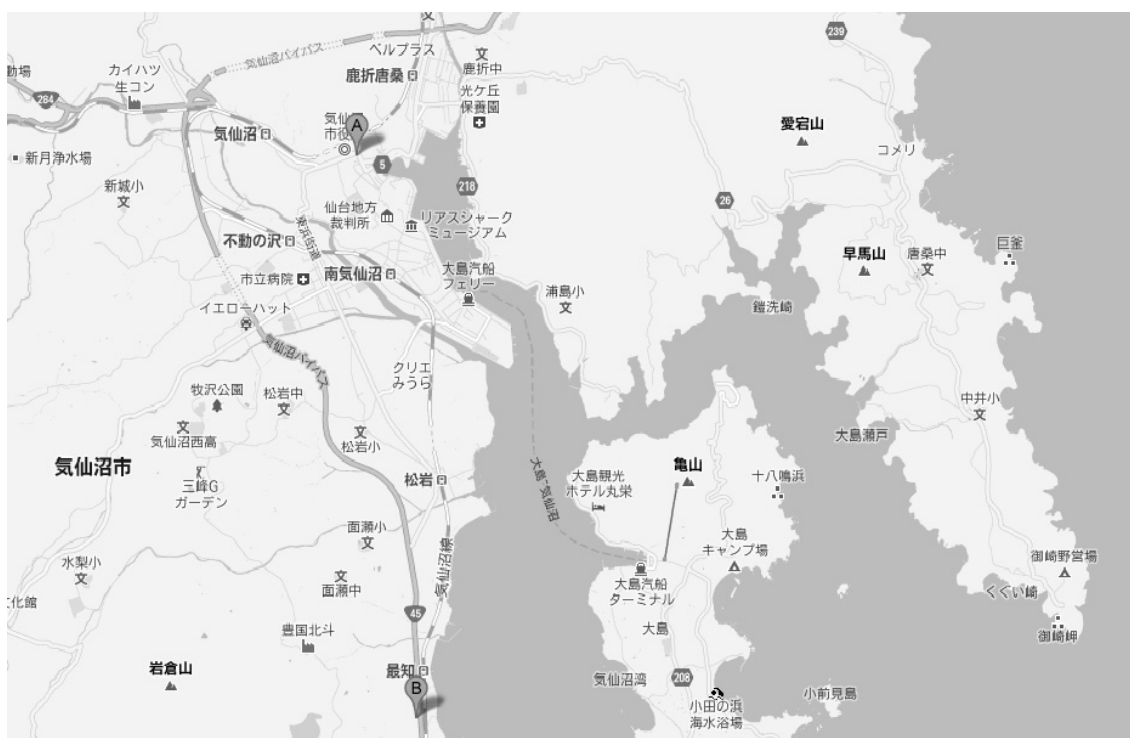
せる」ということが、認知症の方なりにできている。大所帯の良さというものを、改めて感じている。

- ・ 避難していた最初の 10 日間、職員の中には、ライフラインを絶たれて家に帰れず、やむなく泊っている人もいた、職員として、ここを守らなければいけないのか、家族のもとに戻るべきなのかという悩みも大きかったと思う。その大変な時期を乗り越えたからこそ、仕事への意識や思いやりのようなものが生まれている。ありがたいなと感じている。

## 訪問調査 グループホーム村伝

訪問先	有限会社村伝 グループホーム事業統括責任者 グループホーム村伝 管理者 熊谷光二氏 グループホーム村伝おもせ 管理者 根本雅枝氏
被災により全壊・半壊した事業所	グループホーム村伝 宮城県気仙沼市八日町 2丁目 3-5 グループホーム村伝さいち 宮城県気仙沼市長磯後沢 82 番地 3
訪問日	2011 年 6 月 27 日

※ この原稿は、訪問調査を実施した 2011 年 6 月末現在の情報をもとに記述しています。



### <事実関係>

- ・ グループホーム村伝さいちは1F 全壊。グループホーム村伝は床下浸水。グループホームおもせは被害なし。
- ・ グループホーム村伝の利用者・職員は、いったん鹿折地区に避難。グループホーム村伝さいちの利用者・職員はグループホーム村伝おもせに避難
- ・ 訪問調査当時は、3グループホームの利用者・職員が村伝おもせにて生活中

### ○震災・避難の状況等

#### 【グループホーム村伝】

- ・ 当日私(村伝管理者)は気仙沼地域の管理者の集いで、公民館の3F にいた。揺れがおさまらないうちに公民館を出て、ハンドルもまっすぐにならない状態で車を走らせ、グループホームに戻った。あわてて、利用者を車に押し詰めるようにして避難した。重度者の避

難には、軽度者に協力してもらった。外は既に渋滞していて市内に逃げるのは無理だと判断し、思い切って海に向かって逃げた。海水がかなり引いていたので、そこから山に逃げ、反対側の鹿折地区に下りていった。

- ・ 地震イコール津波という認識があった。『行動は早くなければ』と思って動いた。早くしないと、海岸ルートは通れないという認識があった。鹿折地区に逃げた後に津波が来た。火災も発生し、鹿折地区は焼け野原になってしまった。余震が続いていたこともあり、トンネルが封鎖され、鹿折地区を通して市内に戻るすべがなくなった(鹿折地区への道路が開通したのは、5月末であった)。
- ・ 異常さが、いままでの地震時とは違った。道路は渋滞し、町内放送は聞こえない。電話も通じない。『利用者を生かさなくては』…思いはそれだけであった。利用者のことしか頭になかった。
- ・ 『すぐ行動しなければ、選択肢がどんどん減っていく』と思い、とにかく早く行動することだけを考えた。行動が早かったので、利用者は津波を目にしなくて済んだ。避難後20分くらいの時間差で津波が来たと思われる。鹿折地区も津波で8割くらい消滅したが、津波が来たのは自分たちの車が鹿折地区を通り過ぎた後、10～20分後だと思われる。早く動いたのが良かった。
- ・ 2010年12月の津波では、湾に水が上がった。その時も津波警報が出たので避難を行ったが、海岸から50メートルの銀行の建物に水がきて、グループホームの手前まで波が迫った。今回は、地震の規模から考えても、大きい津波が予想された。
- ・ 利用者9名と職員3名および自分(管理者)の13名は、3日間、私(管理者)の実家で過ごすことにした。実家には踊りの稽古場があるので、利用者が眠られるスペースもあった。また、井戸があり、非常時の食料の蓄えもあったので迷うことなく行動ができた
- ・ 他のグループホームとは連絡が取れず、お互いの状況が全く分からなかった。
- ・ 3日間で食料が尽きて、限界を感じつつあったが、避難3日目に携帯がつながり、気仙沼市内に出ることを決断した。近所の人に林道を教えてもらい、道に張っている氷をつるはしで割り、車に積んだ砂利を撒きながら、山を越えて市内に入った。

#### 【グループホームおもせ・グループホームさいち】

- ・ 私(グループホームおもせ管理者)は、同法人グループホームの管理者と共に、気仙沼市民健康管理センターから、山のトンネルの方を通してグループホームに戻った。
- ・ グループホームさいちの職員と利用者は、幹線道路ではなく迂回できる山道を通してグループホームおもせに避難した。利用者は全員防災頭巾を着用していた。
- ・ 2010年12月の津波の時に避難を行っていたことが、今回の避難に奏効した。前回避難時は、グループホームさいちの2Fへの避難という形も考えたが、念のためグループホームおもせへ避難した。グループホームおもせへの避難を一度行っていたことが、今回の迅速な避難につながった。経験が役に立った。

- ・ 最初、津波の規模が判らなかったので、地域の高校の駐車場に避難した。雪が降って寒く、夕方になってきたので、災害時協力施設である(恵風荘)特別養護老人ホームに避難し、そこで一晩世話になった。利用者にはおかゆと味噌汁の夕飯も出してもらった。ホールの場所を提供してもらい、おもせとさいちの利用者をそこに集めた。グループホーム村伝の状況は分からなかった。メールで法人の社長と連絡が取れていたため、指示を仰ぎ、翌朝にはグループホームおもせに全員が戻り、今も過ごしている。
- ・ ここでは当初水道は通じていた。プロパンガスは使用できたが、電気は止まっていた。懐中電灯を用意し、石油ストーブを集めて暖を取った。夜間は、ソーラーライトが 10 個あったので照明として使用した
- ・ 水道は後に使用できなくなったが、当初使用できていたので助かった。食料は民生委員の方が差し入れしてくれたり、近隣の方が野菜を持ってきてくれたりして、さほど不便はなかった。

#### ○職員の状況等

- ・ 当日非番であり、駆けつけることができた職員は1名であった。トンネルの封鎖前に通って駆けつけてくれた。連絡が取れない職員や、連絡が取れても「自宅が被災して、それどころじゃない。」という職員もいた。距離の離れたところから通っていた職員も多かったので、駆けつける交通手段が無くなっていた。
- ・ グループホームおもせでは、翌日には職員が駆けつけることができたが、ガソリン不足もあって、車は使えなかった。
- ・ 震災以降、利用者 25 人に対し、夜勤3名、日勤5名の体制でまわしている。職員の居住地が幅広い地区に散らばっており、ガソリン不足の問題もあって通勤が困難となった。
- ・ ガソリンが支給された法人の車1台で職員を送迎した。送迎時間を利用して、管理者と職員との情報交換ができた。今どう思っていて、これからをどう考えていて、現場で何が起きているか……。そうした話を通して、利用者への心配や、物資の確保についての尽力について、誰がどのような人材かも分かるようになった。
- ・ 「理屈じゃない。来なくちゃいけないと思った。」「利用者さんの笑顔を見ることができて良かった。」「今までのつながりがあるから。」「・・・と語った職員は、避難後もずっとグループホームにいた。途中で「いったん家に帰れ。」と私が言ったくらいである。職員の人となり分かり、指導や教育を行いやすくなった。情報伝達スピードが速くなり、情報共有ができるようになった。
- ・ 最初は2つのグループホーム同士で価値観がぶつかりあった。これまで、各々のグループホームで特徴を持つように位置づけてきたので、それも当然だったかもしれない。加えて過密な状況なのでぶつかりあう。職員同士、互いのやり方に不満が出たりもした。

### ○利用者の様子等

- ・ いつもなら BPSD が頻繁に起こり動こうとする利用者も、避難初日の夜は、一晩動かずにいた。職員も家族の状況が分からず、私(管理者)も途方に暮れていた。火を囲んで、誰も動かず、何も話さず、ずっと火を見ていた。
- ・ 2日目だったか、食料面、医療面の問題もあるので、避難所である中学校に向かった。体育館は、ヘドロを踏んだ足でそのまま上がるので粉塵が舞い、その床にシートを敷いて寝るような状態であった。他の施設の方も見かけたが、これでは利用者には無理だと思い、やはり実家に戻った。
- ・ 室内にこもったきりだったので、軽症の利用者が突然笑い出したり泣き出したりするようになり、その衝動で周りの人間もおかしくなるような状況であった。2日目には『出たい、逃げ出したい。』と思った。利用者は、車椅子使用の方が1人と、認知症自立度2くらいの方が中心であった。職員でローテーションを組んで外での遊びを行ったが、3日目には職員も利用者も限界に達していた。
- ・ 中学校へ向かう途中に(鹿折)地区が燃える様子を見たことで、利用者の感情が不安定になった。生まれ育った町が燃える火を目にしたのが一つのきっかけになり、しばらくは私(管理者)もフラッシュバックで夜眠れない状態が続いた。
- ・ 記憶に障害のないレビーの利用者が、記憶によるストレスで1人入院した。個人的に付き合いのある病院の精神科に入院してもらった。これまで(精神科に)入院希望をしたことはなかったが、初めて願い出たことで、医師も(緊急の)状況を察してくれたのだと思う。
- ・ グループホームおもせの利用者と職員は、今回の津波を目にしないで済んだ。いつもと変わらぬ状況で過ごしている。救援物資が届くようになってからは、食事も日に3回、おやつも提供できていた。
- ・ 大人数で過ごす現状が、プラスに働く一面も見られている。たとえば、若年性認知症でピックの利用者の方は、これまで1人で過ごされることが多かったが、共同生活を営む人数が増え、その中に相性のいい人との出会いがあって、その利用者とは交流するようになった。これまでも行事や特別な機会で、場を共にすることはあったが、互いの個性を現すというところまでは到達していなかった。

### ○利用者家族との関係等

- ・ 職員にも家族がある。特別養護老人ホームに避難した時には、職員の子どもも来て一緒に泊まった。同法人グループホーム管理者(熊谷氏)の無事を周りに知らせてくれたのは利用者の家族であった。インターネットは、役に立った。
- ・ 家族との連絡は、すぐにはつかなかったが、無事が確認されてからは、普段は来たことのないような親戚までひきつれて会いに来てくれる。震災当初は、皆、自分たちが生きることで精一杯だった。

### ○地域との関係

- ・ 地域の方々が毎日のように水を持って来てくれた。顔見知りの方も、そうでない方も、声を掛けたり、野菜を持ってきてくれたりしている。『地域の力ってすごいな。』と思った。以前、隣が火災になった時は、近隣の方がたくさん駆けつけてくれた。助け合いの感覚が根付いている。
- ・ 近隣のお年寄りで、認知症状があるため避難所では居住できない状況の方がいた。病院や民生委員と話し合い、自宅に戻して、グループホームおもせで作った食事を民生委員が届けるという体制をしばらく組んだ。地域とのつながりの一例だと思う。
- ・ 地域の病院の院長先生が、自発的に訪問してくれた。市立病院から退院を迫られていた利用者を受け入れ、職員の心配もしてくれた。

### ○日ごろの運営から役に立ったこと等

- ・ グループホーム村伝は、これまで、信頼関係に基づくトップダウンで物事を進めてきた。管理者は指導者的な立場であったので、「海側に逃げる。」と選択した時にも、通常なら疑問もあろうが、「この管理者が言うのだから間違いない。」と付いてきてくれた。そこで、もめていたら集中力も欠いてしまっていたらうし、即座に動いてくれたのが非常にありがたかった。

### ○支援等について

- ・ 中越、阪神淡路の時には、私は何もしなかった。何もできないだろうと勝手に思った。今回こうして支援を体験したことで、今度はノウハウを伝えることができる。もし次に大震災が起こったら、今体験していることを支援の行動に移したい
- ・ 認知症介護指導者のネットワークはすごい。必要な物を今でも送ってくれる。このつながりが何よりも大切である。自分たちの利益ばかり追求していたら、横とのつながりなど思いもしないだろう。次には、支援のためのたくさんの声を出していきたい。

### ○今後

- ・ 幸いにも利用者と職員は全員無事であったが、事業継続については、いくつかの課題がある。グループホームさいちは、整備基金を受けていたので、復旧に国庫の資金的支援がある。ただし、再建の場所はどうしたら良いのか。津波で全壊した場所に再建するのか。目の前に海が見え、周りにも人がいない場所で、「夜勤の時に津波が来たらどうするのか？」という、今回の災害を体験した者であれば当然感じる思いを解決していかないといけない。
- ・ グループホーム村伝は、交付金の対象外だが、ある団体から資金面での支援がもらえそうである。床下にかなりの泥水が入りカビが発生している。建物自体は、それほどひどいようには見えないが、床を全部改修しないと使えない。



- ・ 仮設グループホームについては、土地が確保されたら市が県までつなぐというスタンスのようである。少しでも早く住環境を解決したい。地域のために一生懸命やっているのだから、そのあたりを適正に判断してほしい。もっともっと早く話が進んでほしい。市は被災でまだ混乱しており、県との連携の方ができている。仙台市は政令都市で、県を通さなくていいから話が早いという話も聞いた。気仙沼は土地が無い。示された方向性には柔軟に対応したい。

訪問調査 グループホームひまわり

訪問先	社会福祉法人典人会 グループホーム「ひまわり」 理事・総所長 内出幸美氏
所在地	岩手県大船渡市大船渡町字山馬越 196 番地
被災により全壊・半壊した事業所	赤崎町デイサービスセンター「菊田」 岩手県大船渡市赤崎町字大洞 1 番地 1
訪問日	2011 年 6 月 27 日

※ この原稿は、訪問調査を実施した 2011 年 6 月末現在の情報をもとに記述しています。



<発生後から1週間くらいの状況>

○介護現場への緊急支援の不足

- ・ 震災直後から一週間の困難は、①物資がないこと、②人手がないこと、の二点に尽きる。こうした状況の中で、「緊急医療」あっても、「緊急介護」はないのだということを痛切に感じた。すぐ近くの病院では、直後から県の職員が入るなどして緊急医療が始まっていたが、介護の現場には誰も来てくれない。職員のなかには、家や家族が流されてしまった者もいて、お年寄りと同じように緊急事態に直面する。現場に来ることが出来ない職員もいる中で、人手はどうしても不足する状態になる。
- ・ 命を預かるという意味では、介護も医療も同じ重みがあるはずだが、赤十字などが使命と

して入ってくる病院と、任意のボランティアに任せている介護施設との違いは大きい。介護は、医療に比べて緊急性がないと思われていないかの検証が必要であり、緊急介護のしくみが望まれるところである。

#### ○備蓄および物資の課題

- ・ 2日目からは、自分たちで市役所に物資を取りに行った。物資が直接届けられるようになったのは3日目くらいからである。米、パン、ろうそく、女性用品、電池など、足りないものだらけだった。
- ・ 特別養護老人ホーム(以下「特養」)や老人保健施設(以下「老健」)では、災害対策として備蓄の義務があるものの、どのくらいの期間を想定して蓄えるべきか等は明記されていない。1週間分程度の飲料水やガスコンロの備えはあったが、実際は足りないものだらけで、自分たちの意識が低かったことを感じた。
- ・ グループホームや小規模多機能などの小規模な事業所にも、特養等と同様に備蓄を義務付けていくことが必要であろう。この点は、公的補助がいくらでも付けば、事業所の意識も高まるのではないかと思う。
- ・ また、小規模多機能やグループホームは、その事業所に避難所の指定がなされているか否かにより、その後の状況が大きく分かれる。避難所指定を受けているところは、避難民が集まってくると同時に、物資、情報などもどんどん入ってくる。毎日、看板にインフォメーションが貼られ、郵便配達の手配も設置されていた。

#### ○地域密着型サービス事業所が果たした役割

- ・ 法人内の小規模多機能事業所では、福祉避難所の指定を受けていない事業所であっても、被災直後に近隣の住民 100 名程度が集まってきた。もともと、近隣住民の事業所に対する理解はそれほど高いものではなかったが、子どもから大人まで、1週間から 10 日程度、寝食を共にする中で、介護事業所や認知症の人に対する意識が変わってきたと感じられた。
- ・ 過酷な被災経験が、逆に、地域の人と事業所との関係や意識を変えるきっかけとなった。震災後は、民生委員や婦人会の集いを事業所内の地域交流室で行うようになった。
- ・ 大船渡にはグループホームと小規模多機能型居宅介護の合築型事業所が2ヶ所ある。今回の震災では両者ともに、大いに地域貢献することができた。
- ・ 背景には、2ヶ月に1度開催する運営推進会議などを通じて、事業所に対する地域住民の認識が高まっていたことがあると考えられる。震災の当日の夜から、地域の人たちが、おにぎりを求めて事業所に集まってくれた。市役所に行くよりも先に、地域の介護事業所を訪ねてきてくれたことは、本当に嬉しいことだと感じる。
- ・ 地域住民への初期の対応は、当法人の事業所の方が市役所よりも早かった。市からの配給が始まるまでの4回分くらいは、それらの事業所で対応していた。

## <発生から3ヶ月頃までの状況>

### ○ライフラインの状況

- ・ 電気、水道、固定電話等が止まってしまい、オール電化の事業所では、全てのライフラインが止まってしまったが、プロパンガスを引いていた事業所のみ、調理は可能だった。
- ・ グループホームや小規模多機能型居宅介護の開設をする際は、行政からオール電化にするよう指導を受けるが、緊急時の対応の事を考えれば、電気とガスを併用しておく方が安全だと感じた。また、スプリンクラーは用をなさないことが分かった。非常時には、物理的なものではなく、職員、利用者の意識が最も大切である。
- ・ 電気が復旧したのは、3月の下旬だった。本部のある典人会では、湧き水を利用することができた。また、情報手段として、光通信は全く機能せず、復旧したのは6月近くになってからだった。

### ○認知症の利用者の状況

- ・ 認知症のお年寄りや、グループホームの中では何の問題なく過ごせていたのに、避難先では耐えられない状況となってしまう。その場をやりすごすだけの3日間は、突然声が出てしまったりして落ち着かない状態が続いていた。そして、また元の場所に戻ると、落ち着きを取り戻しておられた様子もある。避難所や仮設住宅等で続いている課題だが、認知症の症状が出てきた時に、ボランティアの人だけでは対応することが出来ない難しさがある。
- ・ 当法人のデイサービスを利用している、地域の高齢者も、1ヵ月くらい経過した頃からADLの低下が目立っている。ガソリンを調達することができなかつたため、デイサービスも休まざるを得ない状況となっていた。その間、地域のお年寄りや、おにぎりやパンを配給される生活に慣れてしまい、自分の生活を取り戻す感覚が麻痺している様子だった。
- ・ それまで、週に1回程度のデイサービスに通うことに、どれほどの意味があるのかと感じていた家族も、生活力がどんどん落ちていく姿を目の当たりにしたようだった。4月に入ってから、お年寄り自身が買物に出かけるなど、生活をとり戻してもらうための働きかけを続けてきた。

### ○行政との折衝について

- ・ 被災された方への経済的配慮として、厚生労働省は、当初から介護保険料の十割負担に関する通知文を出していた。しかし、被災者の定義が明確ではなかつたため、手続き上の大混乱が生じていた。
- ・ また、厚生労働省からは、特養や老健の実費負担の減免に関する通知が出されていたが、地域密着型や居宅系サービスには該当しなかつた。そのため、該当しないサービスについては、災害発生後の混乱時期を含めて、2ヶ月分の請求を行うこととした。しかし、近隣のグループホームなどでは、請求額が30万円程度になる事業所もあり、結果として、未納者が増えてしまった。経営力のない事業所などは、倒産の危険もある。

- ・ 行政からの通知と、現場の対応とのギャップがいまだに続いており、重要な連絡が、県担当者のところで止まっている現実もある。また、県から市町村への迅速な情報連携が行われておらず、6月末の現在になっても、事業者への対応が何らなされていない状況となっていたり、市町村によって通知の解釈や判断に統一感が無いなどの状況がある。
- ・ 介護保険を専門とする県の担当者が一人でもいれば、事業者側も連携を取りやすいし、混乱は少なくなっていくのではないかと。高齢者率 30%の地域で、高齢者関係の手続き・対応をきちんとしていかなければ、我々もうまく立ち回ることができない。

#### ○仮設住宅に関する課題

- ・ 高齢者の仮設住宅づくりにおける課題も様々にある。人口の3割が高齢者であるにも関わらず、住む人への配慮がなされていない仮設住宅づくりが進んでいる。
- ・ 例えば、仮設住宅は全てが無機質で同じデザインになっているため、高齢者は自分の家を見分けることが難しい。唯一、玄関のドアついている部屋番号は、高齢者の目線には合わない高い位置に、小さく書かれている。敷き詰めてある砂利で転びやすい、生活物資を購入する方法がない、移動販売による高い食材を買わされる等、暮らし難さは様々にある。
- ・ 部屋の番号は色をつけて、見やすいところに設置するなど、些細な配慮でずいぶんと違ってくることはあると思う。また、仮設住宅の中で孤立しないためにも、グループリビングは必要である。認知症ではなくとも、外出がままならないお年寄りには、移動した場所でどうやって暮らしていったらよいか分からない。仮設に入居出来ても、2日目で避難所に戻ってきてしまう人もいる。
- ・ 仮設住宅にサポートセンターを設置するなどの計画もあるが、専門職がそこに待機しているようなものではなく、そこに住んでいる高齢者が、行ったり来たりできるような場所が必要であり、小規模多機能型居宅介護のような要素を備えたグループリビングが求められる。
- ・ 仮設住宅に福祉的な視点を入れて欲しいとアイデアを出そうとしても、行政のどこに提案すればよいか分からない。中越地震等での前例があったにも関わらず、教訓が活かされていらないように感じている。デイサービスでもグループホームでも、高齢者だけしかいない生活は、ある意味奇異な環境で楽しくない。若い夫婦や子どもが近くにいるような環境の中で、一人暮らしの人が周りの人の力を借りながら暮らしていけるような、グループリビング的な視点を取り入れていくと面白い。

(2ヶ月～3ヶ月目くらいの状況)

#### ○職員のストレス(2ヶ月～3ヶ月目)

- ・ 最近になってから涙ぐむようになった職員も出てきている。震災から2ヶ月以上経った現在、ストレスはさらに大きくなっている可能性もあるが、その要因が何なのかは分からない。

## ○津波は人災か

- ・ 震災の経験を通して、自分たちがなぜ生き残れたのか、また、なぜ亡くならなければならなかった人があるのかをしっかりと考えていく必要を痛切に感じている。今回は、津波などの天災があったことは確かだが、地震発生から津波が来るまでの 30 分間に出来ることはたくさんあったはずだ。
- ・ 防波堤などの物的な安全神話は崩され、頼りになるのは一人ひとりの防災意識の高さだ。その意識を保つためにどうしたらいいかを、今回、私たちは考えていかなければならない。赤崎にあるデイサービスは、12 名程度のお年寄りが通ってくる小規模な事業所だったが、津波の訓練を頻繁に行っていた。利用者の中から、日常的に津波の経験に関する話が出ていて、職員のモチベーションの維持に大きくつながっていたと思う。訓練が、1年に1回程度のことだったら、そうはいかなかっただろう。
- ・ 一方で、ハザードマップは全く役に立たなかった。流されてしまった認知症対応型の赤崎のデイサービスは、浸水区域に指定されていたが、もともと、避難するように言われていた場所に行っていたら全員助からなかった。先人の教えとして、山へ、山へと逃げた人が助かった。

## <震災当初を振り返って>

### ○災害時の危機管理について

- ・ 当日、出勤していなかった職員が集まりはじめたのは、震災後3日目くらいからだった。橋が無くなっていたり、道路が寸断されていたりで、山を超えて、やっとの思いで出勤してくる職員もいた。
- ・ 職員や利用者の安否確認は、自主防衛組織を使って山道を歩いてローラー作戦を行うしかなかった。緊急連絡網の整備を行っておくべきで、確認方法は、今後の課題である。
- ・ 痛切に感じたことは、職員自身も被災者であるということである。家のことや家族のことが気になる職員を、現場に引き止めておくことは難しい。震災当日の夜、一人の職員が「帰らせてほしい」と言ってきた。自分は死んでもいいから、確認しに帰りたいと。それだけ緊迫感があった。離れ小島になっていた事業所もあったし、小さい子どもがいる職員は、泣きながら帰らせてくれと訴えた。特にグループホームは小規模な事業所であり、こうした状況を外部の支援者が入るまで、どう凌いでいくかが大きな課題になる。

### ○外部支援チームについて

- ・ 今回の震災後に、石川県の救援チームが来てくれた時は、本当に涙がでるほど嬉しかった。石川県のチームが入ったのは震災後一週間が過ぎてからだったが、支援に入ってくる側も、情報らしい情報が何もなくて、まずは行くしかないという判断で現地に入ることを決めたようだった。
- ・ 先陣の石川チームも、次に来てくれた新潟チームも、現地の我々に全く不安を与えさせない、的確な対応をお願いすることができた。支援者たちは、自分たちの飲む物から寝

るための道具まで、現地が何も世話をしなくてよいほどの準備を整えてきていた。

- ・ さらに、スキルの高い人材でチーム編成ができていたため、何の要望を入れることなく、お年寄りに寄り添ってくれていた。認知症の人は、知らない人が来ると混乱すると言われていたが、専門性の高さからか最初からまったく混乱がなかった。
- ・ オーバーベットの状態の中で、いつもと変わりのない姿勢で利用者に関わっていただけことや、介護、看護、ソーシャルワークの多様な専門人材によるチームであったことが有難かった。
- ・ 被災した職員は、一見、一生懸命動いているように見えて、頭の中は家のことを心配しながら、常にうつろな状態で働いていた。また、それぞれに事情があり、遺体安置所を回っていたり、仮設住宅の手続きにいたり、心身ともに落ち着くことはできなかった。そういう時にも、支援チームの人たちは、積極的に声をかけたり、気配りをしたりながら支援を続けてくれていた。
- ・ 現地が必要とする支援は、震災直後、1ヶ月後、3ヶ月と、時間とともに大きく変化する。物資が必要な時期、人的支援が必要な時期、心のケアが必要な時期など、刻々と変わってくる。支援に入る人たちには、はじめから何も想定せずに、白紙の状態に来てもらうことが望まれる。それは、そこで何が起こるか分からないし、何でも起こる可能性があるからだ。

訪問調査 グループホームあんしん館

訪問先	有限会社ファースト・ケア グループホームあんしん館 管理者 菊地宏実氏
被災により全壊・半壊した事業所	グループホームあんしん館 宮城県気仙沼市唐桑町明戸218番の1
訪問日	2011年6月27日

※ この原稿は、訪問調査を実施した2011年6月末現在の情報をもとに記述しています。



<事実関係>

- ・ グループホームあんしん館は全壊
- ・ 訪問調査当時は、面瀬地区の系列デイサービスに併設する接骨院を一時休院にして受け入れ、仮のグループホームを運営している。

○震災当日の状況等

- ・ グループホームからは海が見えていた。2010年12月の津波警報の時にも避難を行っていたので、3月11日も、すぐ避難行動に移ることができた。
- ・ 地震の時は、利用者1名がお風呂場の脱衣場にいたが、すぐに職員が入って着替えてもらった。地区の方々からいただいていた防災頭巾を全員がかぶった。地震が止まった



と同時に、避難準備を始めたが、地震という理解ができていないせいか、トイレを使用する利用者が続き、少し慌てた。2名がトイレ介助にまわり、1名がバイタルセット等の準備をし、1名が外の様子を確認、1名が金庫や保険証類の用意という体制で準備した。

- ・ 地震が収まってから 10 分以内には避難した。以前消防から「できれば徒歩での避難」と言われていたので、車椅子使用の1名以外の利用者は徒歩で避難を始めた。
- ・ 一次避難所として近くの小学校が指定されており、いったんそこへ向かった。移動の最中に、近所の方から『10メートルの津波が来る』という話があった。
- ・ 小学校の敷地に入ったが、小学校はグループホームとそれほど標高が変わらず、『ここではだめだ。』と思い、上の体育館まで登り始めた。登っている途中、第1波が来て、ホームセンターが流された。感覚では、地震が収まってから 20～25 分間くらいの間の出来事だったと思う。
- ・ 地域の方は優しかった。体育館に登る途中、利用者が階段を上っているのを見て、近所の方や小学校の先生が、利用者をおぶってくれた。
- ・ 体育館では、迫ってくる波が見えており、皆が動揺していた。幼稚園や小学校の子供たちもみんな体育館へ避難していたが、ホームセンターが流されるのを見て泣きわめいていた。2波目、3波目の方が大きいという話だったので、さらに上を目指して避難移動をした。
- ・ 気仙沼で行われていた管理者会議から、ケアマネジャーが車で体育館へ駆けつけてくれた。その車に利用者3名を乗せて、後は歩きでさらに上に向かった。途中、車で避難していた地域の方の車にも何人か利用者を同乗させてもらった。愛宕山の上の障害者施設に利用者は車で移動した。職員は徒歩で向かった。そこは指定避難所ではなかったが、100 名くらいが避難していた。そこで一夜を過ごした。避難用の設備も整っておらず、倉庫のような場所で休んだ。当日は雪が降り、余震で危険だからと窓ガラスが外されていたので寒さが厳しかった。
- ・ 利用者は状況を理解されておらず、「帰る」と言うので車に乗せ、1人1人説明して寝てもらおうというような状況であった。
- ・ 避難する時も、小学校でも、用を足すわけではないのにトイレに行きたがる方が多かった。利用者にも、なんらかのストレスがたまっていたのだと思う。一日目は一晩ほとんど寝ないで過ごした。とにかく寒かった。
- ・ 「トイレに行きたい。」という希望が多く、その機会に話をして全員おむつにはき替えていただいていたが、急に「おむつに」と言われても、できるものではない。
- ・ 防災頭巾は、唐桑の婦人会の方々が制作されたもので、社協を通じて配られていた。着用することで、安心感を得られた。

#### ○震災2日目以降の避難状況等

- ・ この状況では身体的にもつらいため、朝になってから、同じ地域にある社会福祉協議会

(以下、社協)の支所へ受け入れのお願いに行った。OKが出たので、すぐに移動した。ここでは日頃デイサービスが行われており、グループホームも併設されていた。温かく、食事もしっかりいただくことができた。看護師等も待機していた。

- ・ そこでは、施設系避難者と一般避難者を分けて対応してくれた。デイサービスもグループホームもあるところだったので、職員全員で施設系避難者全員をみるという体制を取った。朝は職員全員でミーティングをし、全員で世話をし、夜には全員で報告するという体制であった。手分けして対応することができたので、職員の負担をある程度減らすことができた。
- ・ この時点では、職員の家族の安否は定かではなかった。子供が小さい人も多く、職員に疲れの色が見受けられた。本社との連絡も取れていなかったが、何人かの職員を家族のもとへ帰した。
- ・ 3日目くらいに、本社に繋がる道路が通じ、本社との確認が取れた。「いったんバックアップ施設に調整を取ってくれ。」と言われたが、バックアップ施設である特養は被災していた。
- ・ 利用者の家族に連絡し、施設が全壊したことを伝えて、何人かの方には、いったん自宅に戻ってもらった。家族と連絡が取れなかった3名くらいの方々については、近くの施設が受け入れてくれることになり、一時的に避難させてもらった。利用者を避難させた後、職員もいったん家に帰り、管理者は、本社が運営しているデイサービス利用者の安否確認に従事した。
- ・ 自宅に避難した利用者の方へは毎日訪問した。利用者の家族で亡くなられた方はいなかったが、家族自身が被災している状況であった。家がない、仕事がない。ご高齢だったり、体調を崩されたり、引き取る側の家族も被災しており、利用者の自宅避難は1週間くらいが限界であった。
- ・ 避難するかたちでデイサービスに残っていたデイサービスの利用者を自宅に戻してから、グループホームの利用者を少しずつデイサービスの場所で引き受けたりしていた。その後を話し合い、接骨院とデイを運営していた場所の接骨院の方をいったん停止して、グループホームとして利用者を引き受けようということになった。それが今の場所である。
- ・ 利用者の家族に対し、「前のような状態ではなく、個室ではないし、ベッドの置き方も並びになる。日中もデイの方と一緒にいるため騒がしいかもしれない。それでも始めたいと思うが、どうされるか。」と相談して回った。その結果9名全員が戻って来て、現在ここで生活している。ある程度予測していたが、現状は、利用者にとって、思った以上に負担がある。全体的に血圧が高くなっている。食事の内容など、それほど変えていないので、ストレスが原因ではないかと思っている。男性利用者1名が、血圧が非常に高くなり、脳出血で入院して1週間後に亡くなった。現在の利用者数は8名である。

## ○避難訓練、避難状況等

- ・ 津波を想定した避難訓練は実施していなかったが、消防訓練のたびに「津波がきたらどうしたらいいか。」「冬場の場合どうすればいいか。」「夜1人の時は、どうすればいいか。」と消防に尋ねていた。気仙沼から唐桑に入る道は2本あるが、2本とも海辺を通る道であり、津波の場合は通行できないことが予測された。「気仙沼からは応援にいけない。消防もいけない。唐桑が孤立するリスクもある。」と言われていた。
- ・ 職員の半数は唐桑の出身であった。唐桑地区は津波訓練が行われている地区であり、津波は「怖い」という意識が植え付けられていた。避難所となる施設に逃げる時には海辺を通らなくてはならなかった。3月11日の前(9日)にも大きな地震があったので、避難は頭にあった。夜間に避難する可能性があるので、「必ずポットにお湯を入れておいてね。」「かごに必ずセットを用意してね。」「防災頭巾の場所を確認しておいてね。」などと伝えていた。
- ・ 地震発生時、点けていたテレビも何もかもが消えた。「情報がないなら、いったん逃げた方がいい。」と思い、避難を即決した。道路を走りながら、「逃げろ。」「高い津波が来る。」と伝えてまわっている人もいた。切迫感があった。
- ・ 2010年12月の津波警報の時にも、実際に避難した。お昼頃避難し、「もう津波は来ないだろう。」と、夜遅くにはグループホームに帰ってきてしまった。津波は数10センチであったが、本当は翌日まで避難を続けているべきだったのだろう。
- ・ 避難時を振り返ると、最初から車で移動すればよかったと思う。「歩くように」言われていたが、実際には、地域の人たちが車で逃げているのが見えた。高齢の方が多い地域なので、車で逃げるのはしょうがないことだと思う。車で避難する場合、車に乗せる時間と降ろす時間が気になった。渋滞で車が動かなかった場合に途中で降ろしてまた歩き出す時間も考えた。消防訓練で消防の方は、必ず「歩いて避難。」と言っていたが、渋滞回避のためだと思われる。
- ・ 車に同乗させてもらえ、本当に助かった。避難途中、いろいろと助けてくれる人が多かった。避難する車の窓をたたいて「(歩いて避難している利用者を)乗せたりや。」と言ってくれたり、勝手にドアをあけて利用者を押し込んでくれたりもした。避難する途中の運営推進会議メンバーが、気がついて車に乗せてくれたり、いつも行くローソンの店主さんがおんぶしてくれたりもした。
- ・ 常に、近所の店や郵便局などに顔を出し、施設の目の前に立つ夕市へ出かけるなど、普段から地域との付き合いがあり、コミュニケーションを図っていた。そのせいか、顔を覚えていてくれて乗せてくれた。表現は良くないが「普通の人じゃないんだから、なんとかしなきゃ。」という意識でみんなが助けてくれた。施設から避難する前にも、近所の方や唐桑在住の職員の家族が、玄関まで来て「逃げろ。」と教えてくれた。
- ・ 避難中は、他の事業所と連絡も取れず、判断の拠り所がなかった。唐桑からの道は、どちらも寸断されており、避難所を移動する場合も、「これでいいのかな、これでいいのか

な。」と迷いながら判断を続けた。土地勘のあるスタッフが多かったので、相談しながら判断した。

- ・ 避難先の社協でも、地元出身の職員同士が顔見知りであったため、間借りの身ではあったが、肩身の狭い思いを感じることなく過ごすことができた。

#### ○利用者の様子等

- ・ 妊娠中の職員が、夫が海辺の仕事に従事していることもあり、「もしかしたら。」と、やや取り乱した時、利用者が、その職員の肩をさすってなだめる場面もみられた。
- ・ 避難が長くなることが予想されたので、職員が、利用者全員に上着を一枚着せて避難した。雪が降り、寒い日だったので、これは助かった。小学校の次に行った障害者支援施設は、知的障害の方々と一緒に、急に大きな声が聞こえたりすることもあり、利用者は怖がったりもした。
- ・ 唐桑の社協支所に着いた時点では、施設系で避難してきたのはうちだけだったので、ブロック分けして職員も手伝いに加わった。利用者の皆は状況を理解されておらず、歌をうたったり、冗談を言ったりしていた。そのことで職員は救われた。全員がピリピリしていたら、しんどいところだった。
- ・ 利用者はある意味強さをもっている世代であり、避難中にも、「しょうがねえんだ。」という言葉が聞かれた。障害者支援施設では、紙コップに入れたおかゆが配られた。指定避難所ではないのに、よく配給してくれたと思う。配られたおかゆを見て、「戦争の時こうだったな。」「ああだったねえ。」と、戦時中の話で盛り上がることもあった。不安がる利用者を別の利用者が肩をたたいて慰めるなど、利用者同士がお互い助け合う姿も見られた。
- ・ 地域からの一般の避難者には高齢の方が多く、職員が世話をして回った。ペットボトルにお湯をいれて湯たんぼ代わりに渡したりした。
- ・ 津波のことは覚えていないのに、津波発生の間になると身体が震えだす利用者がいた。今は治まっているが、身体がなんらかの衝撃を覚えているのだろうか。
- ・ 津波後、これまでになかった言動を発するケースもある。赤ちゃんを捜そうとしたり、自分の子供を捜す言葉を言ったり。「認知症の方だから、(津波を)覚えていないから、ある意味良かった。」ということではないのだと思った。利用者には、気持ち的にも身体的にも負担がきてしまっていると感じている。
- ・ この震災前まで工夫して行ってきたことが、震災でゼロにされた感がある。たとえば、かなりの時間をかけてリハビリパンツから普通のパンツに替えることができたのに、今の状況下では、ふたたびリハビリパンツに戻さざるをえない。たとえ小さいことでも、細かく計画を立てて行ってきたことが、振り出しに戻されてしまったという感覚がある。職員も疲れている。しょうがない部分もある。でも、みんなでふんばってやっていきたい。仮設に入れば、何かはまた変わるのではないかと思っている。

#### ○職員の様子等

- ・ 避難中、職員は何名か家族のもとに戻したが、管理者自身は自宅には帰っていない。避難中、最初のうちは携帯電話が通じたので、職員にメールで家族の安否を確認するよう指示し、自分も確認した。自分の家族は無事だったので、子供のいる職員、夫が海辺の職業である職員を優先的に帰した。中には「辛い知らせを知りたくないで帰りたくない。」という職員もいた。
- ・ 震災当日は、気仙沼市内在住の職員は、たまたまほとんど出勤していた。気仙沼在住で当日勤務ではなかったのは1名だけであった。唐桑在住の職員は非番であったが、すぐに駆けつけてくれた。また、唐桑在住のデイサービス職員が応援にきてくれるなど、利用者と1対1になれるくらいの職員数であった。助け合う地域性があるからである。
- ・ グループホームでは、職員の人的被害はなかったが、通勤用の自家用車を置いて逃げたので、当日出勤していた職員の車は全部流された。全部ない、あまりに何もなさすぎて、みんな笑っていた。「しょうがね。」って言いながら。1人2人の分だったら悔しいが、全部だったのでそう考えるしかなかった。
- ・ 直後の通勤は、会社の車の使用許可が出て、デイが活動するまで会社の車を使用した。施設系だとガソリンも入れられたので、それを利用して乗り合いで通勤した。
- ・ 職員はみな疲れている。現状、同じ環境のところにデイとグループホームが併設しており、仮設が決まったら、人員配置を変えていくかもしれない。適材適所で異動なども絡めて考えていけばいいと思う。

#### ○地域との関わり等

- ・ 唐桑地区は、自然な付き合いがベースにある。ホームには畑があったが、職員には畑経験がなかった。近所の方に「畑の機械を貸して下さい。」と言うと、貸すだけでなく耕してくれたり、仕事を代わってくれたりするような土地柄であった。常時から利用者が外に出かける機会を数多く設けるようにしていた。職員の実家の畑で職員の家族と触れ合ったり、小学校が近かったので、職員の小学生の子どもと触れ合ったりするなど、職員の家族も含めてグループホームに関わってもらっていた。
- ・ 自治会長、民生委員の地主など、運営推進会議のメンバーが比較的地域に顔の広い方々だった。管理者自身、グループホームでの勤務は初めてであり、職員にもグループホーム経験者がほとんどいなかった。そこで、「わからなければ聞けばいい。」「できないことは助けてもらおう。」というスタンスで臨み、実際地域住民に助けてもらっていた。
- ・ 職員を地元から採用することで地域への溶け込みも図った。しかし、利用者のうち、唐桑在住者は1人しかいない。家族の側に「見られたくない」、「帰ってこられたら、どうすっぺ」という思いがあるようだった。

### ○現在の状況

- ・ デイサービスと施設共用であるため、ある時間になると人がいっぱい来て、ある時間になるといなくなる。「あれどこさいったんだっぺ？」という問いに対し、「帰った」と言うと、「おれも帰んねば」となるので、デイの方と重なる時間には、バスハイクや散歩に行くなどして、人の『いる、いない』をあまり感じないように、いろいろ動くようにしている。
- ・ 職員の通勤では、道の封鎖などで以前よりも時間がかかる。日によって 25 分だったところかが 40～45 分くらいかかったりする。道路が壊れていたり、海側のガードレールがなかったり、街灯がなかったりで、暗い時間の交通には難がある。したがって、宿直体制を取り入れ、夜遅い時間の移動を避けるようにしている。早番、遅番もなくし、日勤帯のみにしている。ここにきてから、宿直専門の職員も採用した。

### ○支援等

- ・ 現在の場所(面瀬)も、地区の人はとても親切である。散歩の時に会う方には必ず挨拶するようにスタッフに伝えている。どこの地域でも顔を覚えてもらうことが大切だと思っている。実際、先日、利用者が玄関から出て行ってしまった時にも、近所の方が、すぐに教えに来てくれた。「顔を覚えてもらうと助けてもらえるかな。」と思っている。
- ・ 物資面では、地域の方々はもちろん他地域の方々からも、多くの支援をいただいた。車椅子がたくさん送られてきたし、ベッドももうすぐ届く。福岡のグループホーム協議会の方々からダンボールで物資が届くなど、こんなにもいろいろ動いてくれる方が世の中にいるのだと思えただけで、気持ち的にだいぶ違う。「やるしかない。」という状況なので、どうしようと思う時間などなくて、かえって良かった。
- ・ 物資の中に色紙が入っていることが多かった。そうした色紙からはすごく力をもらった。知らない人の言葉であり、特別なことが書いてあるわけではないのだが、「祈っています。」など、いくつも積み重なって、受け取るこちらの気持ちに響いた。何もかもがなくなった環境なので、全部がありがたかった。

### ○制度等

- ・ 被災者が、十分な説明を受けられていないように思う。減免にしても手続きが複雑であり、申請しないと適用されないため、本来支払わなくてもいいものを支払うケースも見受けられる。病院のお金、施設のお金、それぞれに二度手間三度手間をかけなければならない。市役所に行けば教えてくれるが、市役所はひどく混雑している。車を流失した人も多く、市役所までの足も不足している。減免対象になっても「面倒だから」と申請しないケースも多い。
- ・ 制度が次々設定されても、一般住民には良くわからない。もっとわかりやすくないものか。また、申請しなくても、被災証明がそのまま使えるようになるなどの工夫がほしい。知識がないとだめ、自分が動かないとだめ、申請しなければだめ、一つのことにも何度も

動かないとだめ・・・という状況である。

- ・ 「仮設さえ決まってくれれば」と思う。仮設が決まれば、なにかのきっかけになると思う。何か変えなくちゃいけないという部分が気持ち的にもある。仮設での再開をきっかけに変えていきたい。
- ・ 他のグループホームの状況が分からず、不安であった。どこの施設が被災し、亡くなられた方がいたのか、いないのかがわからなかった。亡くなられた方がいたグループホームの方を前に、「うちの方では、死亡した方はいません。」と言ってしまった時は、後で「知っていれば違う対応ができたのに」と悔やまれた。

#### ○今後について等

- ・ 現在の場所(面瀬)も海が見える。施設から海が見えるのは、職員にとっては大きなストレスである。津波はすぐその川(面瀬川)まで来た。「次に津波が来たら、止めるものがないので、ここまで来るんじゃないか。」「次が怖い。」と職員は不安を感じている。
- ・ すぐにもここを出たい気持ちはある。仮設でグループホームを行いながら、先のことを考えていこうと思っている。
- ・ 仮設を検討している場所は唐桑地区ではない。唐桑地区で許認可を取ったのだから唐桑地区で再開すべきだが、唐桑地区は道路が2本とも津波で寸断されるリスクがある。道路をもう少し整備してもらえるのであれば、唐桑に戻りたい。本来であれば、唐桑で再開すべきであるし、お世話にもなっている。地域の方々とも良い関係を築いている。
- ・ いずれにしても、仮設の2年間は唐桑ではない場所で事業を行おうと思う。土地は、高さのあるところにした。本社や知り合いや職員の情報などから選定した。田舎なので土地は余っており、高台には、これまで注目されていなかった土地がたくさんある。
- ・ 「他の施設の役に立ちたい」という思いがある。まずは、自分たちの力をつけていくことからである。
- ・ 事実が把握できないと、推測でしか対応法を考えられない。噂で入るくらいなら、はっきり事実を公表した方がいいと思う。「なぜそこで」「なぜその判断ができたか」事実を把握して、また同じことがあった時に活かしたい。情報を、学びとして頭に入れていた方がいいと思う。記憶は、記録に残さないと表に出ていかない。これだけのことがあったのだから、みんなが次のみんなに引き継いでいかななくてはならない。
- ・ あの時、判断材料がなく、判断する状況になかったのだ。そこが問題だったのだ。状況もわからずに責任転嫁をするのではなく、事実を共有して、「うちはこれで、こういうことがあった。」と考えていくことが必要である。
- ・ 今回の震災を、「しょうがないよね」「みんな予想できなかったからね」で済ましてはいけない。「あの状況でよくやった」という情報と、「上手いかなかった」という情報から、もっと学びたい。
- ・ 職員はどこかみんなぎりぎりである。動揺もある。職員の精神科通院が増えているとい

われるが、同じようなことが、いろいろ起きているのではないかと思う。震災前と環境は激変して、職員は、こんなに追い詰められるのだなと感じている。

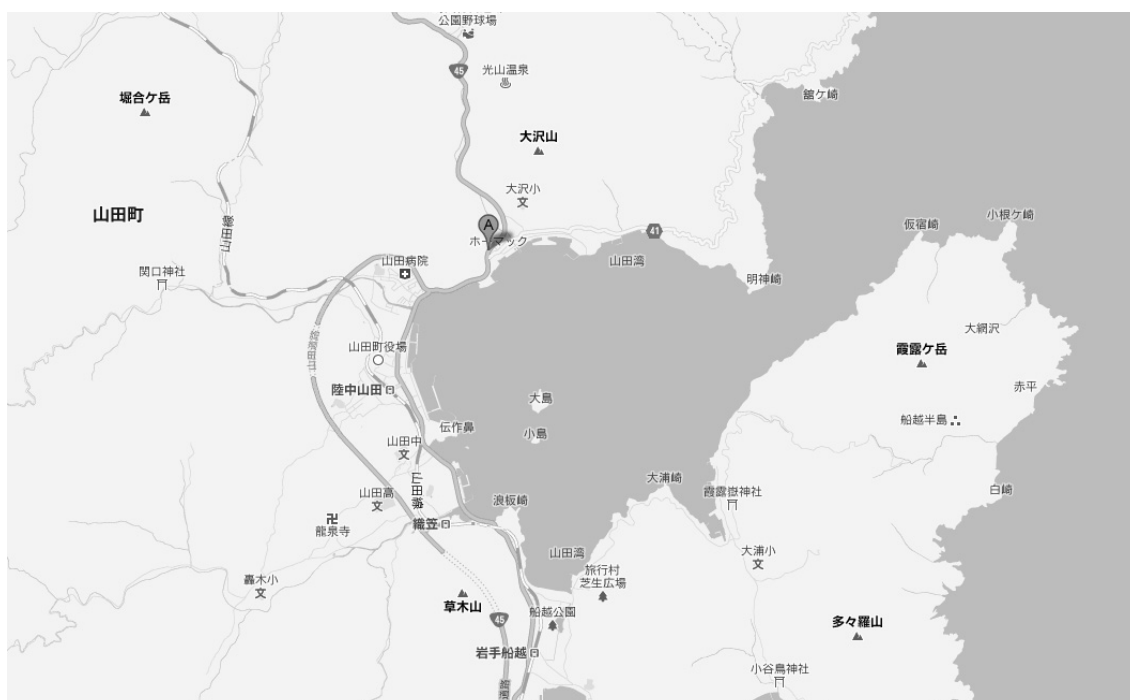
- ・ 管理者は、何かあった時の責任を取り、判断を下す役割だと意識している。だが、管理者が不在の緊急時に、その役割を職員が担い、判断せねばならないという状況は変えていくべきだと思う。
- ・ 震災後に採用の求人をして、前ほどには集まらない。集まっても、職員は初めての方が多い。経験者が集まらない。少ないという印象がある。『少し休みたいのかな。』とも思うが、これを機に辞めた職員もいると聞く。職員を補充したい気持ちはある。しかし、以前のように、「しっかりアセスメントをして、ケース会議を開いて、ケアプランを作って。」というように、きちんとした運営をするには、まだ時間がかかると感じている。



## 訪問調査 グループホームまぶる

訪問先	有限会社ヘルパーはうす 代表取締役 グループホームまぶる 管理者 金田 茂氏
被災により 全壊・半壊した 事業所	グループホームまぶる 岩手県下閉伊郡山田町大沢第2地割6番地3
訪問日	2011年6月27日

※ この原稿は、訪問調査を実施した2011年6月末現在の情報をもとに記述しています。



### <事実関係>

- ・ 山田町では、津波とともにプロパンの爆発による火災発生
- ・ 岩手県下閉伊郡山田町大沢に立地していたグループホームまぶるは全壊
- ・ グループホームの利用者、職員には人的被害なし。
- ・ 法人の自社建物が流され、前代表取締役とヘルパーが流された
- ・ 訪問調査当時は、山田町豊間根の空家を借りて、グループホームとデイサービスを運営

### ○ 震災当日の状況等

- ・ (私は、当日岩手県グループホーム役員会で盛岡に出向いていた。震災当日の状況については、聞いた話である。)
- ・ 地震が発生し、すぐに避難の準備をした。このあたりは地震＝津波なので、常に津波を想定し、津波注意報から津波警報になった時点で、車に乗って一次避難場所に逃げると

いう訓練をしている。今回は、注意報をとびこえ、最初から大津波警報だったので、すぐ避難した。

- ・ 避難準備に20分くらいかかったと聞いている。全員避難することができたのだが、これまで10分ほどで車に乗せて避難するという訓練をしてきたので、20分かかったというのは不満である。薬の箱まで持ち出すことができたそうだが、物を持って逃げるという、そういう心の余裕があったというところは多少ひっかかる。人的被害がなかったからいいが、大地震の時には、何も持たないで逃げる方が的確だったのではないか。
- ・ 一次避難場所である地域の小学校に避難し、体育館の中には入らずに車の中で待機していた。職員は、波が来て会社や自分達の車が流されるのを、小学校から目の当たりにした。
- ・ 職員が、学校の中を確認した。床の状態や階段があることなどから「年寄りには適していない」と判断し、数100メートル離れた大沢ふるさとセンターに移って一泊した。小学校については、これまでも、何回か行って見て、「避難に適さない」と皆が認識していた。
- ・ 避難場所では、利用者のトイレが頻回だったと聞いている。特に困ったという話は聞いていないが、震災当日なので食べ物がなく、おにぎり1個を4等分して4人で分けたとか、飲み物がなくて困ったという話を聞いた。

#### ○2日目以降の状況等

- ・ 大沢ふるさとセンターで、他の避難者から「なんでこんな時に、こんな所に年寄りを連れてくるんだ。」といった言葉があった。今思えば、大惨事なので、そういう言葉を発する人がいても当然だろうし、なにぶん利用者は、夜間何度もトイレに行くような状態なので、同じ部屋に避難していた人達は気になっただろう。こちら側だけの事情を言っていられる状況ではなかったので、「まあ、しょうがないな」と思う。
- ・ しかし、「やっぱりここには居られない」ということになった。現在借りているこの家が空き家であることを知っていた職員が、機転をきかせ、大家さんに相談したところ、「使っていて」と言ってくれて、震災後2日目にここに避難してきた。
- ・ 管理者がケアマネージャーをしていたころ、この家の主が要介護者となり、その世話をした関係があったことから、とても優遇してもらっている。賃貸契約も無しで、家賃も受け取られない。「いらない、なんぼでも使って下さい。」と言ってくれている。ここに移ってすぐに、避難所指定を取ってくれて、それ以降は物資や食べ物関係で困ることはなかった。その後も、いろいろな助けが入ってくれて、不便に思うことはなかった。

#### ○避難の状況等

- ・ グループホームから小学校までは、500メートルほどあり、車で移動した。要介護度平均3.3くらいの状況だったので、利用者を車に乗せるまでが大変だったと思われる。
- ・ 平日頃から訓練していたので、あわてることなく避難できたと思う。いつものように避難し

たことだろう。薬を持つ余裕があったのは、「津波といっても＝30～40センチくらい。大きくても1メートルくらいだろう。」との感覚だったからであろう。『10メートルからそれ以上のもの』という感覚はなかったと思う。

- ・ チリ沖地震(2010年2月)の時は、小学校に避難した。警報が解除されたのは夜中だったが、警報が解除される前の夕方5時くらいには、「環境が合わない。」ということで、ホームに帰った。注意報の段階では避難の準備をするだけであり、実際に避難するのは、警報になった時点である。そのため、避難に至るようなケースは2年に1回あるかないかである。ただし、去年は多かったように思う。

#### ○職員の状況・体制等

- ・ 7名の職員は、小学校への避難から、ふるさとセンター、現在の場所、と全員がずっと続けて勤務してくれている。ここに移ってきてからは、居宅介護サービスも行っており、ヘルパーとケアマネも一緒に勤務している。
- ・ 私は、震災時にいた盛岡から1週間たってこの場所(豊間根)に入った。職員の中で、1週間後にも家族の安否が分からない状態だったのは1～2名だった。人員的には不足はなかったが、1人の利用者を4人の職員が交代で世話したり、布団から、動けない利用者を4人がかりで起こしたりしていた。その体制を立て直すことから取り掛かり、徐々に通常の日勤帯や夜勤の人員体制に戻っていった。
- ・ グループホームの職員には被災者はいなかったが、法人の代表取締役とヘルパーさんが1人亡くなった。家族や自宅が被災した職員もいる。震災後しばらくは、通勤するにも車がなく、ガソリンもなく、ほとんどの職員が泊まり込みだった。「自宅で何か用事を片付けたい」という時には、無事だった2台の会社の車で送迎し、やりくりした。
- ・ 基準に則した運営を行っていないと、介護保険の請求ができないのではないかと心配がある。本来のグループホーム体制に戻すことには気を配っているが、現状は、個室ではなく大広間を利用しており、仮設や再建の話があるものの、この状況がいつまで続くのかという不安は常にある。

#### ○今後の見通し等

- ・ 仮設グループホームへは、早ければ8月のお盆前に入居できる見通しである。仮設グループホームは、津波が押し寄せたところの延長線上に建つので、もしまた大型の津波が来たらどうなるかわからない。波を遮る建物が少なくなっているため、同じレベルの津波でも今度は遠くまで押し寄せるだろう。そういう心配も若干ある。建物がなくなったために海が近くに見えて、「こんなに近いんだ。」と驚くほどである。
- ・ 現在仮住まいの豊間根は海が見えないが、居宅担当のヘルパーさんは巡回しているので、「もし津波が来たらどこに逃げればいいのか。」「年寄りをどうすればいいのか。」と、不安を口にしている。

- ・ 津波が来ると言われた時にどうすればいいのか、会社のトップから指示を出しておくべきだと思う。仕事に入っていれば、職員は利用者と共にしか動けないと思う。「どうしたらいいのか」という、方策と指示まで、きっちりしておかなければいけないと思う。一回このような事態を経験したからこそ、そういう指示を確立しておかねばならないと思うようになった。

#### ○震災体験を経て思うこと

- ・ グループホームの防災を市町村だけで考えるのはダメだと思う。地域密着型と言われるが、防災面だけで言えば意味をなしていない。個別のグループホームだけが被る火災等であれば、地域の人々が皆集まってくれることもあるだろうが、地域全体が被災するという状況下では、協力は一切得られない。「訓練しなさい。」「地域を交えてやりなさい。」・・・それは行うけれど、「自分たちは自分たちで守る」という意識を強めておかないと、たった9人の高齢者でも助けられなくなる。
- ・ 町からの援助はある。物資は配られるが、本当に必要としているものは、1週間単位、月単位で変わっていく。お金も物も必要に応じた的確な対応が必要である。
- ・ 行政には様々なことを尋ねに行っているが、こちらが求めている答えは得られない状況である。たとえば交付金でも、最初に建てた時に交付金をもらっていないからという理由で、災害復旧交付金の適用対象にならない(注:設置主体が市町村、社会福祉法人、医療法人以外の場合、交付金の交付を受けて整備した事業のみ交付金の対象となる)ことなどである。
- ・ グループホーム協会には、不安を聞いてもらったり、軽減してもらったりした。
- ・ 被災して、ここに移ってきてからは、「利用者を自宅に帰るのが本筋である。」とか、県の職員からは「利用者を県外に出しなさい。」とか、いろいろなことを言われた。しかし、利用者の家族も、家を失くしていたり、避難所にいたりする。行政の職員も混乱しているのではないか。しかしながら、提案された様々なことは、行政からみればベストなのかもしれないが、グループホームと利用者にとってはベストではないと思えることもある。
- ・ 辞めたいという職員もいたが、「やめてどうするの。」と話した。職員もそれぞれの状況を抱えている。気持ちの強さ、弱さ、家がない、家族がない、車がない・・・様々である。職員から「いつまでこの環境で介護をするのか。」「利用者の家族の許に帰すことを考えないのか。」と言われたこともある。
- ・ 私自身は弱気になってはいない。震災後6日目くらいに代表取締役が流されたのが分かった。その次の日、ここ(仮ホーム)に入ったが、職員と利用者の顔を見て、「私が引き継ごう」と決意が固まった。「会社をどうしよう」という思いにはならなかった。
- ・ 避難所指定は5月の初旬に解除された。「食べる物を外からもらっているのは、グループホームではない。」というようなことを行政職員に言われた。自分にも「本来のグループホームの動きに戻さなくては。」という考えもあった。食事料金もその他の料金』として徴収す

るのが本筋、とってはいた。ただ、行政も、あまり支援を続けられないだろうと感じた。

- ・ しかし、3ヶ月くらい経った今頃から、様々な面でいろいろな問題が出てくるのではないかと案じられる。利用者の健康面、職員の体調面。現在、グループホーム協会を通じて介護ボランティアの支援を受けているが、「しばらく継続をお願いしたい。」と伝えている。震災から時間が経てば、張り詰めていた気も少し緩み、必ず何か出てくると思う。利用者も、これまでは安定していたが、動きが出てくるとケガや転倒のリスクが生まれる。今からが問題である。「3ヶ月経った。」ではない。「まだ3ヶ月」だし、どうやって続けていくか、これからが問題なのである。
- ・ 仮住まいである現状の良い面もある。ここに来てから大広間暮らしになっているが、この2～3ヶ月間、利用者はわりと落ち着いている。一つには、個室ではなく大広間で布団を並べて寝ているので、目が覚め、目を開けて左右を見た時に、知っている顔があるという安心感があるのではないかと考えている。その効果か、夜間も落ち着いている。職員側も、見渡せば利用者全員が一目瞭然であるので「大広間にも良さはある」と新たな認識が生まれた。
- ・ 仮設グループホームについては、2週間くらい前に「着工が始まった」という話だった。

#### ○利用者の様子等

- ・ 今回の震災を理解している利用者も1～2人いるが、口に出すことはない。食べ物に好き嫌いを言うことはあるけれど、この環境に文句を言う利用者はいない。利用者は、みな力を落とすことなく、現在の環境に適応している。「80歳を過ぎても、認知症があっても、まだまだ適応能力がある」と改めて思った。
- ・ 利用者は、常に自分よりも家族のことを気にしている。津波があったとか、家が流されたとかはあまり気にしていないが、家族に何かあると不安になるようである。家族と連絡がつかなくなると、ずっと家族のことばかり話している。震災当初、利用者の家族へはなかなか連絡が取れなかった。家族も避難所を転々としていた。全員に連絡がつくのに1ヶ月くらいかかった。その間、利用者には行動の変化はそれほど見られなかったが、口から出てくる言葉には、家族に関する不安が多かった。家族も利用者の状況を不安に思い、グループホームの避難先を追いかけて訪ねてきてくれた。電話で連絡がついた一人の利用者の北海道に住む甥は、北海道からすぐに会いに来てくれた。
- ・ 幸い利用者の家族はみな無事であった。どの家族も月に1回は訪ねてくれており、利用者もそれで落ち着いていると思う。通常のグループホームとは異なる状態で運営しているが、料金のことで何か言う家族はいない。

#### ○支援等について

- ・ 声を大にして言いたいのは、介護ボランティアのありがたさである。最初に受け入れる時は、「介護混乱などないだろうか？」と心配もしたが、いったん入ってもらったら、ボランテ

ィアがいてくれることで他の動きが可能となり、職員に事務的なことを頼んだりもできる。非常に助かっている。来てくれた男性の介護ボランティアは、非常に丁寧な介護をする方で、今では職員の方が、「ボランティアさんいつ来るの？」と待っているような状況である。本日から岡山の介護ボランティアチームが来てくれる予定である。

- ・ 仮設に移る時は、現在ここにいる職員のうち、グループホームの職員のみが移動する予定である。
- ・ 仮設に移るにあたり備品の手配を進めているが、交付金の対象となる物、ならない物があり、すぐに手配できる物と、2～3ヶ月かかる物がある。利用者に移す時には、「全ての環境を整えて、利用者が気持ちよく移れるようにしてから。」と決めている。
- ・ 仮設グループホームにあらかじめ用意されるのはカーテンのみと聞いている。テレビ等報道では、「なんでも揃っている。」という話だったが、確認してみたらカーテンのみとのことであった。最終的な確認はしていないが、グループホームの場合、備品関係の交付金が700万円下りるので、そちらで手配ということなのであろう。テレビをはじめ電化製品、介護用ベッドなど、700万円の見積もりに含めて県に申請している。
- ・ 不便に思うことと言えば、今もインターネットが繋がらないことである。業者も来てくれたが、パーツが揃わないらしい。こうした不便さは、地域によっていろいろあるようで、他の地区では「ネットはできるがFAXができない。」「光通信ができない。」などの話を聞く。地域ごとに抱える問題や不便さに違いはあり、どこもまだ少し不便な状態が続いている。
- ・ 震災後、当初は1週間に2回くらい、他県からの医師団が来てくれていた。「薬を処方してもらい、それを取りに行く。」という形で利用していた。今は頻度が1週間に1回となっている。じきに2週間に1回となるらしい。町内に病院がなくても、避難所での診察は続いているから、グループホーム本来の『通院』という形にしていこうかと思っている。
- ・ ちょうど今朝、利用者が転倒したので地域の病院に連れて行っただが、まだ設備が整っておらず、レントゲンも撮れないような状況であった。経過観察扱いで、特に何もせず帰されてしまった。震災前は、町内の全ての病院を利用していたが、町内の病院・医院は、かなりなくなってしまった。現在は、避難所に派遣されている医師の所へ行ったり、専門の先生が町内にいない場合は宮古まで行ったりしている。
- ・ 地域包括支援センターからは職員である看護師が来てくれたが、『地域包括』の仕事で来てくれたことはないように思う。看護師として、医師に付いて歩くことで精いっぱいのものである。こうした状況下では看護師の業務が優先されても、それは正しいのかなとも思う。「緊急時はここに連絡してください。」など、電話で心配してくれたりしていた。
- ・ 震災2日目に、100歳の利用者2人が宮古病院に搬送になって一晩入院した。「もう少し、あと2～3泊お願いします。」と頼んだが、「若い人も入ってくるし、そっちも助けなくてはならないのだから」とのことだった…今となれば状況はわかる。でもその時はきつかった。
- ・ もともとの地区では近隣との付き合いがあった。地域の皆さんは避難所暮らしをされている。今は、音信不通の状態である。

- ・ こうした状況でも、「外部評価やりなさい。」「公表制度もやりなさい。」という連絡が変わらずある。「時期をずらしてでも受けなさい。」という指示もある。外部評価は、まだ判るが、公表制度は、どちらかといえば書類中心で、その書類は一切流れてしまった状況であり、現状、書類を作成しうる環境にない。今の時点で全てやらなくてはいけないことなのか。受けなくてはいけないものなのか。誰のためにやるのか。疑問に思っている。たとえば1年免除といった措置など考えられないのかなと思う。今は、やりたいことに集中させて欲しい。それだけでいい。
- ・ 法人自体が流されたため、定款から登記から全てをやり直す必要がある。けれども、その内容がかみ合わない。代表を解任したわけではなく、災害が原因である。日付一つでも書類が整わないことがある。行政には、「こうした方がいい。」など、どうしたら一番いいかを教えて欲しい。
- ・ 非常時、有事なのだから、確認を行政にも手伝って欲しいと思われた。変更届も何もかも、全ての書類がスムーズに行かなかった。町の役場が流されたので、40分かけて宮古の役場に行く。でも、宮古だって被災地である。時間をかけて書類を取りに行っても、公証役場が1週間休んでいたりして、滞る。みんな被災者だからしょうがない。通常の状態ではない。どこまでも遅れていく。役所に行かないと動かないシステムになってしまっているが、有事にはもう少し簡単にならないのか、と思う。何をやるにも時間がかかりすぎる。でもそこをクリアしないと次に進めない。

## 第2部 東日本大震災追悼式典

「“3.11 を忘れない！”～これから私達にできること～」被災地からの報告より

以下の原稿は、公益社団法人日本認知症グループホーム協会が平成 24 年 3 月 26 日に開催した「東日本大震災追悼式典」において、被災地からの報告として発表された内容を、報告者の了承を得て転載いたしました。

『いち職員の日をとおして』

グループホームございしよの里 介護支援専門員 古川 貞治氏

### 1. 施設の概要

施設名： 有限会社 古川商事 グループホーム ございしよの里

所在地： 釜石市鶴住居町

開所年月日： 平成15年 9月 1日

定員： 2ユニット 18名

当施設は、2ユニットで1階にデイサービス(定員25名)を併設しております。特徴として地域交流を重視し、地域のお祭りや運動会への参加、デイサービスと合同の夕涼み会開催、地域住民学生との交流を積極的に図るなどの地域と共に生きるグループホームを目指し運営しております。

施設名の「ございしよの里」の由来は、地域のシンボルであり信仰の対象となっている御在所山よりいただいております。

施設の被害状況としては、利用者・職員共に身体的外傷はなく、建物の被害状況は、2階まで一部浸水(国の基準では全壊)となりました。

### 2. 事例

平成23年3月11日

デイサービス           利用者18名 職員 7名

グループホーム       利用者18名 職員16名

その時は、急に訪れました。地下で「ごーごー」と岩盤同士が擦れるような音が微かにし、当施設が避難所となっていたため、グループホーム2号棟から施設長が走り出し、車両を安全な場所へ移し、駐車場内のスペースの確保を行いました。私は、職員と共に利用者さんの安



全確認を行い様子を伺っていました。利用者さんは、職員対応の元、それほど動揺する様子もなく、少し騒がしい程度でした。その時点での行政からの指示や連絡はなく、行政放送も耳にする事はありませんでした。当施設は避難場所になっていたため、小・中学生、教職員、父兄、医療機関関係者、地域住民が集まり始めました。

施設長から待機指示があり、車を出す事もできず、提供時間中だった事もあり、ホールにて情報の確認等を行っていました。

施設周辺道路は、父兄や関係者の車で渋滞し、小・中学生が施設内より徐々に移動を始め、道路は人で溢れておりました。移動する学生は恐ろしいくらいの静けさの中、次の避難所へと坂を昇って行きました。何故移動を開始したかと言えば、施設中庭すぐそばの、岩が崩れたためです。余震で再度、岩の崩落の危険性を懸念したための移動でした。

我々は、移動しませんでした。それは道路状況、退避に要する時間等から津波が来た場合、退避中の危険を感じ、退避は困難との考えに至ったからです。

決断の要因として施設長が常々、三陸沖の津波は到達まで25分と職員に伝えていたためでもあります。

私は、3mの津波が予想されるとの放送があったと伝え聞きましたが、私をはじめ学校関係者も耳にすることはありませんでした。仮に3mの津波であれば湾を超え、防波堤を超え、街に進入する危険性は無かったはずです。

私と施設長は、道路のざわめきを聞きながら最終確認のため、川の方へと向かいました。その時、道路には小中学生を含めた多くの人達が移動しており、知り合いの消防団員が「来た一。」と叫びながら逃げるのに遭遇し、500m以上先の川の水が逆流し、黒い壁状の波を目にした時、急遽、大声を出しながら施設へと戻り、裏山へと走りました。その裏山自体あまり高い場所ではなく、安全とはいえませんでした。退避するところはそこしかありませんでした。

利用者さんの中には、足腰が弱い方、認知症の方、視力障害、脳梗塞後遺症の方等おりましたが、職員の速やかな行動により、利用者・職員共に死傷者を出す事なく退避は完了しました。

水は川を超え、当施設周辺の町内になだれ込み、その勢いで、車や家が流される様子を目にしました。まるで、それは現実離れた映画やテレビで見る、よその災害を見ているようでした。家屋の柱がバリバリ音をたて、車や家財が流れてきてはぶつかる音、水の音、様々な音で溢れ、水の勢いは、予測できない動きでイロイロなものを巻き込みながら、水かさを増していきました。

目の前では、車や家は、壁や山の壁面にぶつかるまで流され、水の底へと消えていきまし

た。見慣れた街の様子は、どんどん壊されていきました。

この間、どれ程の時間が過ぎたのか……。やがて地面が見えるほど水が引き、そしてまた波が押し寄せる。これがどれ程続いたのかあまり記憶がありません。

利用者・職員は、水のおしよせる方向から遠いグループホーム別棟談話室(木造2階建て2階部分)に退避していました。本館へ戻るよう外から指示を出しましたが、本館への扉は、水圧で変形してしまい開きませんでした。職員は、利用者さんをテーブルの上に上げ、倒れないようおさえる、怯える利用者を宥める、外の様子を伺う、ただ呆然とするなどの状態でした。

水は1階の天井を押し上げ、2階の床を割り、そこから浸水し、膝の辺りまで押し寄せ、水圧や滑りやすくなった床に足を取られる利用者、状況をのみ込めずにいる利用者、水の冷たさを訴える利用者など、予断を許さない状況を呈し、「もう駄目だ。」と言うもの、「お世話になったみんなと死ぬなら良い。」というものなど、一人ひとりの心の中には恐怖より絶望感が空間をうめていきました。

そうしているうちに、水の勢いは対流するだけとなり、徐々に水かさを減らしていき、地面があらわになって見えて来たものは、全壊した家等は勿論、形のある家もあるはずの場所から消えていました。すべてが泥と砂におおわれ、周りでは、壊れた車からけたたましいクラクションの音がなり響いていました。

私は、ぬかるんだ瓦礫の上、釘等に気をつけながら恐る恐る施設へと移動しました。施設のガラスは跡形も無く、外壁のヘーベルは部分的に壊され、内部はケイテンが落ち、泥と砂と瓦礫に覆われ中へ入ることは出来ませんでした。

非常階段の泥とごみを片付け、避難の安全を確保したあと、1階部分や道路状況の確認をしましたが、見た限り、利用者さんが退避するのは困難と判断し、もともと耐震強度の高い、1号棟の清掃、片づけを出来る範囲で行い、その後、使えるものがないか瓦礫の中を探し、見えそうなものを目の届く範囲に集積しました。

2階に退避していた利用者さんの状況を確認後、浸水を免れた衣類を探し利用者さんに着替えさせ、1号棟ホールへと移動しました。3月の日暮れは早く、この時点で外はもう暗くなっていました。開かない扉を壊し、適度な換気が保たれるように配慮し、施設長の決断により室内の暖を取るため焚き火をすることになりました。例年より寒く、朝夕の冷え込みもあり、汚れて冷えた体を温めるために薪になりそうなものを探し、あらかじめ見つけていたノコギリで適度な大きさに切り、火種はライターから取り、鍋の中に薪をいれ、焚きつけとして、未使用で濡れていなかった介護日誌等の紙を使用しました。

出来るだけ肩をよせ腰を下ろし、9時頃に利用者さんの介護度の高い方から、浸水を免れた6畳間に寝具を敷き、足の踏み場のない中休ませました。その他の利用者さんを火の近く

に集め、職員が交代で見守り、暖をとらせました。

寒さのため、横になるものもなく、施設長はみんなを励まし、安心させるように、一晩中、笑い話や昔話をし、みんなの気持ちを和ませておりました。

使用できた懐中電灯は、1つしかなく、これを使い夜中じゅう、たきぎ拾いは続けました。冷蔵庫、棚の食料は浸水し、食べられるのは飴玉だけで、それを利用者さんの口に入れてあげました。

私は、外の状況把握と避難経路の確認、行政の対応を知るべく、月明かりの中、外へと出ました。瓦礫の中を「夢だ！夢だ！」と大声で自分に言い聞かせるように家を探すもの、家族の安否を尋ねようとだれかれかまわず声をかける人、施設の状況を説明しても、誰一人理解してくれる人はいませんでした。

瓦礫の中は、静けさと暗闇だけで、唯一、大槌方面の山影が、火災のため赤く光り続けていたのがみえました。

外から施設に戻ると中は、かすかに暖かく、煙であふれていましたが、皆、寝ているのか起きているのか、うつろでした。6畳間で横になっている利用者さんがトイレに起きたとき、誰かの足を踏んだりして「痛い」という訴え以外は、誰も声を出す人はありませんでした。

職員は利用者さんの生命を守る事を優先し、それを実行してくれました。命に寄り添うという事を、これほど真剣に経験したことは、どの職員も初めてではなかったかと思えます。

関係する人が必要なものは何かと聞きながら、少しばかりではありましたが物資を持ってきてくれました。私は県の薬剤師会を通じて、被災したドラッグストアから商品を持ってきてもいいとの話を頂き、瓦礫の中に行きましたが、そこにはすでに人だかりが出来ており、奪い合いが起きていました。

瓦礫の山を登り、瓦礫をどかしながら、飲めるものを探し、施設へ飲み物を持ち帰り、皆に配りました。これが震災後始めて口にする水分でした。

施設長をはじめ、職員に状況を報告後、順次消防の指示で退避することとなり、退避経路の準備と確認、工程の打ち合わせを行いました。歩ける人は職員が付き、二人一組で工程に沿った移動を開始しました。自力歩行が困難と思われる利用者さんは、竹の棒2本用意し布をくんで簡易タンカを作り、腰の部分にロープを渡し、前後1名ずつタンカを持ち、両サイドの人が首から肩にロープを掛け4人体制で1人の利用者さんを担ぎ、瓦礫の中を運び出しました。毛布でくるまれた利用者さんは、ただただ重く、想像以上に苛酷な作業で、これは正に生命の重さと感じました。足場の悪い中、一人ひとりが歩調を合わせ進んでいきます。誰一人として倒れることも許されず、瓦礫、屋根、泥と砂のアップダウンする道なき道を進み、幾度となく繰

り返しながら、仮の避難所に運びました。利用者さんに不安を与えないよう話しをしながら、風景が見えないように毛布でくるみ方も、気を使いました。施設から2名、消防隊員3～4名、地域住民1名で行い、私はそのほとんどに加わりました。消防の方は、おんぶで対応できる利用者さんをおぶり、補助員と共に仮の待避所へ運んでくれました。

広範囲の被害状況のため、限られた時間で対応しなければならない、次の現場へと向かわなければならない、隊員の立場は苛酷でした。そんな中、タンカ搬送中に転倒した隊員がおりました。肉体的、精神的に追いつめられるという極限状態の中での作業中に、理解できない利用者さんが足を止める、道路に座り込み、寝そべる利用者さん、タクシーを呼べと訴える利用者さん、急に歩けなくなる利用者さんに困惑し、戸惑い苛立つ隊員の方も見受けられました。想像を絶する状況だったとしか説明ができません。

一時避難所からは、準備が整い次第、車で移動し、1m程の傾斜を支えながら登り、三陸縦貫道へと上がり、そこより工事業者のトラックで避難所へと移動しました。

避難所への移動は、一時避難所への移動と同時におこなわれましたが、全員が避難所に移動を終えるまで5時間以上かかりました。

避難先は、ある介護施設と聞いておりましたが、着いた避難所は、小学校体育館でした。運転手さんに、その旨を話しましたが、「ここより先には行かれないし、また戻らなければならない。」ということでした。

小学校体育館には、300～400名ぐらいの方が避難しており、トイレが1か所のみ、車椅子がない、与えられたスペースからトイレが遠いなど大変でした。ひっきりなしにトイレ誘導にあたる職員、また、なかなか寝付かない利用者さんの対応にあたる職員、職員の疲労はピークでした。

当初、聞いておりました介護施設に移動するため、次の日の早朝から一般のバスにより移動を始めました。

その介護施設は、バス停留所から歩いての移動で、自力歩行が無理な利用者さんがいたため、職員1人がその施設に行き、車を出してもらいたい旨を話しましたが、避難所として受け入れる話は聞いていないといわれ、やむを得ず、500m位離れた場所の避難所である中学校に行き、行政の方を探して依頼、車を出して頂き、避難所である小学校に移動することができました。その小学校では、教室を1部屋提供していただき、一般の方とは別だったので、職員は精神的に楽でした。

介護施設から、利用者さん10名と職員3名だけでよければ受入できると話しがあったのは、震災から4日目でした。

全員を受入してもらえず、避難場所が2カ所になったことで、職員体制はより大変になり、依

頼し全員を受け入れていただいたのが、震災から6日目でした。

避難場所が1か所になったことと、デイサービスの利用者さんが帰宅したことで、職員は、交代で休むことが出来ました。

避難所として受け入れていただいた介護施設は、2週間後デイサービスを再開したため、朝食後にデイサービスのために清掃、その後、別部屋の一角へ移動し、デイサービス終了後戻るという生活でした。別部屋で与えられたスペースは狭く、職員は、現実を受け入れられませんが、利用者さんは現実を受入れられずにおりましたので大変でした。

全国グループホーム協会の皆様のご支援のおかげで、施設の復旧工事は、予定より早期に進み、震災から40日で施設に戻ることが出来ました。

現在、利用者さんと職員全員、元気に生活しております。

### 3. 考察

事例作成の為、当日の状況のヒヤリングを行い、検証して行く中で、あの状況で一人の犠牲者も出さず、遂行できたのは正に奇跡であったと思います。当日、翌日の天候によっては、退避等に更なる時間を要することとなったと考えたとき、幸運だったと言わざるを得ません。

想定を超える災害時において利用者の安全を守ることの難しさを感じ、行政機能だけの対応は難しく、デイサービス・グループホームにも男性職員がいなければ対応が困難な場合が多々あり、自分の生命を守るだけで、手いっぱい状況では、地域の助け合いも機能せず、行政(消防等)対応のみで行おうとすれば結果として、他の方の生命を間接的に危険にさらす事となり、高齢者施設においては生命に寄り添うサービスを提供するため、常に最悪の事態を想定した人員配置、災害対策マニュアルの徹底化、具体的訓練の実施、より危険を回避した立地や建築物、避難経路の確保、利用者、職員分の三割増し以上の3日分の食料、寝具、非常電源、医薬品等の備品、整備の高台への設置、避難時利用者情報のわかる書類の常備等が必要かと思いました。

地域、行政、協会等との防災、災害時の連携したマニュアル作りも必要かと思われました。

最後に余談ではありますが、私の元同僚が在宅ヘルパーとして働き始め、主任と一緒に訪問中に亡くなりました。この事からもわかるように、すばやい決断と、すばやい退避が何より必要かと考えられます。

東日本大震災追悼式原稿 『人』～ 支え合ってこそ ～

日本認知症グループホーム協会岩手県現地災害対策本部 本部長

特定非営利活動法人今が一番館 グループホーム今が一番館 施設長 横山久子氏

東日本大震災で被災されました方々のご冥福をお祈りさせていただきます。そして、これからは被災地で復興に向けて頑張っている方々へのエールとして、私たち「グループホーム今が一番館」が関わらせていただいた支援活動をご報告させていただきます。

まず、初めに岩手県認知症高齢者グループホーム協会災害対策本部を引き受けました当ホームの紹介を簡単にさせていただきます。岩手県滝沢村にある当ホームは、田んぼに囲まれ、南部片富士と呼ばれる岩手山がよく見えるのどかな環境にあります。近くには東北本線があり、時折、遊びにいらしたご隠居さんのお孫さん達が、電車が走っていく様子を喜んで見ていることがあります。『今が一番。安心して下さい。いつもあなたの傍に私達があります。』という介護理念のもと、日々、ご隠居さん達と穏やかに過ごしております。

平成23年3月11日、あの日、当ホームでもかなりの強い揺れを感じ、その後、停電となりました。一番必要としていた情報は、普段、聞き慣れないラジオからしか得ることの出来ない生活が、3日間続きました。幸い、水道・ガスは使えたので、煮炊きをすることは出来ました。しかし、灯りは、ランタンと懐中電灯、暖は、反射式のストーブでとりましたが、安全でない上に台数もあまりなかったため、ホールと食卓にのみ2台置き、天井からシーツを下げ、暖気が逃げないようにしました。やっと電気が使えるようになった4日目から悩まされたのは、食料とガソリン不足。どこへ行ってもまともに入手出来ず、当ホームのように車がなければとても不便する地域では、困難を強いられました。そんな中、職員達が自分の家の買い物他にホームの買い物もしてくれたり、近所の農家から分けてもらった野菜を持って来てくれたり。そして、ガソリンがないため、まだ雪の残る道路をいつもの倍以上の時間をかけて、自転車や徒歩で出勤する職員等と、皆、ご隠居さんたちを本当の家族のように思い、ホームを守るために、自分達が出来ることを考えて、実践していました。この時に、職員の中には今までになかったこうしてはられないという思いが芽生えたのだと思います。

ご隠居さんが寝入っている時には、困ったなと思うほどの音をたてて走る電車が、しばらく走っていないことに気づいた頃、近所にある岩手県産業文化センターという施設に、全国から送られてきた物資が運ばれているということを目にしました。いつもオムツを注文しているところの工場が、震災の影響で閉鎖してしまい、また、トイレトペーパー等の消耗品も入手しづらくなっていました。今までは、自分達のホームの生活を守ることに必死でしたが、私たち

内陸の人間ですら、この状況であるのなら、沿岸の被災地域の人達は一体どんな我慢をしているのだろう、非力ながらも私たちに出来ることがあるのではないかと思い、居ても立ってもいられなくなり災害対策本部を引き受けることにし、早速、施設の敷地にプレハブを設置しました。さらに、岩手県認知症高齢者グループホーム協会の副会長と監事の3人で沿岸地域を北から南まで安否確認に歩きました。そこで、全壊したホームは4箇所ありましたものの、ご隠居さんの犠牲者は一人もいなかったという感激の事実も確認できました。

4月上旬には全国から送られてきた支援物資が、当ホーム宛にどんどんと届きました。本格的に沿岸地域への支援として物資の配達を始め、協会の皆さんも協力してくれましたが、毎日送られてくるととても量が多い物資を仕分けしたり、要望のあるものをホーム毎にまとめたりという作業は、なかなか追いつかず困り果てていました。そんな状況の時に、吉田浩さんが北海道江別市から単身キャンピングカーで、応援に来てくれました。今まで運び込まれるまま乱雑に置かれていた物資を見やすく整理してくれたり、全国から途切れることなく応援に来てくれるボランティアさん達のコーディネートをして下さり、また、人員が足りないときには自ら物資の配達やボランティアさん達を現地まで送迎して下さい等と、私たちだけでは出来なかったことを八面六臂の活躍で、一緒に活動して下さいました。

吉田さんの力強い応援があったため、私たちにも余裕が出来、被災されたホームの職員さん達のことも考え、片付けや物資の配達だけではなく、介護のお手伝いもボランティアさん達にさせてもらえるように話してみました。初めは、どこのホームでも「大丈夫です。」「私たちが出来ます。」と頑なに拒んでいましたが、何度かアプローチしていくうちに「じゃあ、話し相手になってもらおうかなあ・・・。」という声が出てくるようになりました。今回、最初にボランティアに来て下さった方たちは、ほとんどが西日本のグループホームで勤務する職員さん達でした。遠方から来ていただいていることもあり、当ホームでは温かい食事でもてなし、旅の疲れを癒すため布団で横になって休んでもらってから、現地に送っていました。中には、滞在中の食事や寝袋等を準備してきている方たちもいました。青森県のグループホーム協会さんからはコンスタントに2人ずつ1週間の予定で来て下さり一番館で送り出し、送りを受けて交替していました。張り切りすぎてバーンアウトということにはなってほしくないと思い、稼働日数の調整もさせてもらい、また、被災地から戻られた時には盛岡名物の食事でもてなしをしました。特に、今回のようなどこを見渡しても悲惨な光景しかない中でのボランティアということで、一度リフレッシュしてから無事に帰っていただきたいという気持ちが強くありました。現地から戻ってくる車内で「涙が止まらない・・・」と慟哭された方もいたので、特にその思いは強まりました。

一方、当ホームの職員達は、あの時に強く胸を突かれた思いから、新たな支援活動を始めました。被災地への物資の配達に加え、当ホームで寝泊りするボランティアさん達への食事作り、とはいえ満足に入手できない食材料での調理だったので、人数の多い日にはメニューを考えるのにも一苦労でした。更に、内陸への二次避難所として開放したホテルからの要望により、仲間のホームさんと交替が必要な方への入浴介助の他、認知症状の見られる方たちへの日常のお世話、閉じこもりになっている方をパブリックスペースへの連れ出し、他の方たちとコミュニケーションをとれるようにしたり、部屋に一人で戻れない方には目印としてドアに簡単な飾りをつけたり、たくさんの辛い思いを吐き出したい方々への傾聴等にも歩きました。特に、ホテルのような何階に行っても、同じドアが並ぶ場所というところが余計に認知症状を進めたのかもしれない・・・と、常に不安げな様子で廊下にいる方のことを心配していた矢先、担当していた福祉課から「仮設住宅に当たったから、ホテルを出る」と聞いた時は唖然としましたが、住み慣れた地域に対する思いを考えると成す術はありませんでした。そして、残念でしたが、その方の支援は終わりました。

災害対策本部としての存在が周知されるにつれ、様々な要望を次々とこなしていただくまで精一杯な毎日でしたが、今回の活動により、滝沢村から福祉災害避難所として登録させてほしいとの言葉をいただき、受託しました。職員の努力が評価されたのだと嬉しく感じ、また、理念に基づき困っている人の心に寄り添っていく職員を誇りに思いました。

当ホームの近くの線路を走る列車を、一日に何台か見かけるようになりました。今までとは違うゆっくりとしたスピードですが、たくさんの貨物を引っ張っていくその様子は力強く、運ばれてくる荷物を被災地に届けなくてはと勇気をもらえます。毎日、たくさんの支援物資が届きました。ダンポールに貼り付けられた紙には「頑張って」「負けないで」「応援しています」の言葉が多くありました。送ってくれた方々への思いが、この物資を必要としている人達へ届いてほしいと強く思いながら、精一杯、輸送しました。

あれから一年が経ちました。

全国からのたくさんの支援をいただき、とりあえず衣・食・住は整った環境になったように思われます。ただ、瓦礫の山は以前と変わらない状態で、あちらこちらに見られますし、まだ建設許可が下りていないため、新しい建物はどこにもありません。まだまだ、あの時のままです。ただ、住み慣れた地域に戻られた方のように、故郷に対する思いは誰にでもあると思います。その思いこそが、そこで生きていこうという思いこそが、地域の復興に欠かせないものだと思います。被災地の皆さんが望む安心できる生活が戻るまで、私たちは支援を続けていきます。これからも、私たちは皆さんと共に。頑張りましょう、岩手！





グループホームにおける災害時対策に関する研究報告書別冊

東日本大震災 被災グループホームに学ぶ

---

2012年3月発行

- 発行 公益社団法人 日本認知症グループホーム協会  
東京都新宿区大京町 23-3 オーキッドビル 8F  
TEL 03 (5366) 2157 FAX 03 (5366) 2158

禁無断転載



